

## 東京を描いた詩について えどはくカルチャー「詩の東京（全9回）」実施報告（第1回から第4回）

行 吉 正 一\*

### 目 次

はじめに

#### 1. 「パンの会」－北原白秋と木下杢太郎－

はじめに

##### （1）「パンの会」

①概要

②「パンの会」の会場

##### （2）木下杢太郎

①木下杢太郎

②木下杢太郎の「パンの会」時代の詩

##### （3）北原白秋

①北原白秋

②北原白秋の「パンの会」時代の詩

おわりに

#### 2. 石川啄木と宮沢賢治

はじめに

##### （1）石川啄木

①石川啄木

②石川啄木の東京

③石川啄木の短歌

④石川啄木の詩

##### （2）宮沢賢治

①宮沢賢治

②宮沢賢治の東京

③宮沢賢治の詩

おわりに

#### 3. 萩原朔太郎

はじめに

##### （1）萩原朔太郎

- ①萩原朔太郎
- ②萩原朔太郎の東京
- (2) 萩原朔太郎の詩
- おわりに
- 4. 中野重治、プロレタリア詩人たちのうたった東京
- はじめに
- (1) 「民衆詩派」の詩
- ①民衆詩派
- ②白鳥省吾
- (2) アナキズムの詩
- ①アナキズムの詩
- ②萩原恭次郎
- ③森竹夫
- (3) プロレタリアの詩
- ①プロレタリアの詩
- ②伊藤信吉
- ③中野重治
- ④小熊秀雄
- おわりに
- おわりに

キーワード 詩 東京 パンの会 木下杢太郎 北原白秋 石川啄木 宮沢賢治  
萩原朔太郎 民衆詩派 白鳥省吾 アナキズム文学 萩原恭次郎  
森竹夫 プロレタリア文学 伊藤信吉 中野重治 小熊秀雄

## はじめに

本稿は、「えどはくカルチャー」で行った連続講座「詩の東京」(全9回)(2003年度～2014年度)のうち、第1回から第4回までの実施報告である。この講座は、東京を描いた詩を鑑賞すると共に、それらの詩を通して東京の歴史を説明することを目的とした。

全9回の内容は、以下の通りである。(1)「パンの会」の詩、(2)石川啄木と宮沢賢治、(3)萩原朔太郎、(4)プロレタリア詩、(5)戦中戦後の詩、(6)現代詩、(7)浅草の詩、(8)銀座の詩、(9)

---

\*元東京都江戸東京博物館学芸員

新宿の詩。（1）から（6）までは、明治時代から現代に至るまで、時代順に東京を描いた詩を紹介し、（7）から（9）までは、地域別に東京を描いた詩を紹介した。

明治時代になり、日本の首都は東京となり、東京は政治・経済・文化の中心となった。詩人など文学者の多くも東京に集まり、東京は文学の中心地となっていった。彼らは、新しい時代に見合った表現方法・文体を模索し、表現する内容も、思想・政治・生活・恋愛・自然・戦争と平和など様々な内容を詩に取り込んでいった。

そのような中で、多くの詩人が東京を主題とした詩を作った。東京は魅力と刺激にあふれ、詩のテーマとなり得る都市だったのである。彼らは、それらの詩によって都市東京の魅力や歴史を伝え、東京で営まれる様々な人々の生活を描いた。

むろん、詩は芸術作品であり、客観的な記録ではなく、そこに描かれた東京は現実の東京ではなく虚構の東京である。しかし、東京を描いた詩には、その時代の東京の姿が、強く反映されていることも確かである。この講座では、東京を描いた詩が、言語による虚構の芸術作品と認めつつ、そこに現実の東京の姿を透視し、東京を描いた詩を、東京の現実の歴史と関連づけながら読んでいった。そうすることで、東京の歴史を学ぶことになり、また、東京の地域の特徴を知ることにもなる。そして、土地の歴史の蓄積の厚さを認識し、さらにその地域への愛着が湧き、その地域を大切に思う気持ちも育むことにもなる。それは、一般の方々向けの連続講座「えどはくカルチャー」の目的の一つでもあった。

また、多くの詩人が東京を描いたが、教科書も含め一般的な書籍には、意外にそれらの詩は掲載されていない。それらは、東京というあくまで一地域についての詩であり、日本中の人が鑑賞できるわけではないので割愛されていると考えられる。したがって、東京を描いた詩はあまり知られていないのも事実である。そのようなこともあり、東京を描いた詩を紹介する講座を開催した。

ここでは、連続講座「詩の東京」の第1回から第4回までの内容を加筆訂正し、再構成して報告する。本稿に引用した詩の本文は、それぞれ、最新版の全集に依った。

なお、全9回は以下の通り実施した。

1. 詩の東京1 「パンの会」－北原白秋と木下杢太郎－

日時：2003年3月20日（木）14：00～15：30

場所：東京都江戸東京博物館 会議室

2. 詩の東京2 石川啄木と宮沢賢治

日時：2004年3月12日（木）14：00～15：30

場所：東京都江戸東京博物館 会議室

3. 詩の東京3 萩原朔太郎

日時：2008年1月24日（木）14：00～15：30

場所：東京都江戸東京博物館 会議室

4. 詩の東京4 中野重治、プロレタリア詩人たちのうたった東京

日時：2009年2月12日（木）14：00～15：30

場所：東京都江戸東京博物館 会議室

5. 詩の東京5 戦中・戦後の詩にみる東京

日時：2010年3月26日（金）14：00～15：30

場所：東京都江戸東京博物館 会議室

6. 詩の東京6 現代詩がとらえた東京の姿

日時：2011年5月18日（水）14：00～15：30（2011年3月25日（金）の延期）

場所：東京都江戸東京博物館 会議室

7. 詩の東京7 浅草をうたった詩

日時：2012年3月21日（水）14：00～15：30

場所：東京都江戸東京博物館 会議室

8. 詩の東京8 銀座をうたった詩

日時：2013年3月13日（水）14：00～15：30

場所：東京都江戸東京博物館 会議室

9. 詩の東京9 新宿をうたった詩

日時：2014年3月25日（火）14：00～15：30

場所：東京都江戸東京博物館 会議室

## 1. 「パンの会」ー北原白秋と木下杢太郎ー

### はじめに

「詩の東京」という連続講座の第1回は、明治40年代の若い文学者や美術家たちの懇談会である「パンの会」を取りあげた。「パンの会」は、文学史的に言えば、自然主義文学に対抗する、浪漫主義・象徴主義の文学者たちの集まりである。彼らは、明治後期の都市東京を若い感性で多くの作品に残した。

「パンの会」が興った明治後期の日本は、国内的には立憲国家として法制度を整え、国外的には日清・日露戦争を戦い、欧米型の「近代国家」としての道を歩み始めていた。また、その首都である東京では、交通などの都市インフラが整備され、近代産業も発展し始め、江戸とは異なる新しい近代都市としての姿を現わしていた。

文学の面でも近代化が進められ、新しい文学ジャンルとしての詩が成立し、韻律の決まった定型詩から韻律の自由な自由詩になり、さらに詩に使われる日本語も、文語に代わって口語が使われ始めた。

「詩の東京」という連続講座では、東京が近代的な都市の姿を取り始め、詩も近代的な口語自由詩が成立していった明治後期の「パンの会」から始めることとした。

### （1）「パンの会」

#### ①概要

「パンの会」とは、1908年（明治41）から1912年（明治45）にかけて東京で催された芸術懇談会の名

称である。1908年（明治41）末、芸術雑誌「方寸」同人の美術家、石井柏亭、山本鼎、森田恒友と、この「方寸」に関係していた芸術雑誌「明星」系の若手文学者、木下杢太郎、北原白秋、吉井勇らが発会した。「パン」は、ギリシャ神話の牧羊神のことである。この会は、美術や文学などというジャンルの枠を超えた交流の場として次第に盛況となり、やがて、文芸誌「スバル」をはじめ「三田文学」、「新思潮」の関係者も参加し、文学面では反自然主義的なサロンとなっていた。1909年（明治42）、1910年（明治43）がその盛時であり、後に自然解消の道をたどった。北原白秋、木下杢太郎らが発刊した雑誌「屋上庭園」は、「パンの会」の成果の一つである。

その会に参加した詩人たち、主に、木下杢太郎、北原白秋、吉井勇は、「パンの会」の雰囲気の中からそれぞれの作品を発表し、それらの作品の中に「パンの会」当時の東京を描いた詩が含まれる。なお、この講座では、木下杢太郎と北原白秋をとりあげ、短歌を残した吉井勇は割愛した。

また、版画家たちの集まりである「方寸」の美術家たちも「パンの会」の重要な構成員であるが、ここでは割愛した。彼らの残した版画には、当時の東京の風景が数多く残されている。

## ②「パンの会」の会場

「パンの会」は、東京の隅田川河畔など、主に下町の西欧料理屋を会場として催された。木下杢太郎は、「パンの会」の会場について、次のように回想している。「当時我々は印象派に関する画論や、歴史を好んで読み、又一方からは上田敏氏が活動せられた時代で、その翻訳などからの影響で、巴里の美術家や詩人などの生活を空想し、そのまねをして見たかったのだった。是れと同時に浮世絵などを通じ、江戸趣味がしきりに我々の心を動かし。で畢竟パンの会は、江戸情緒的異国情調の憧憬の産物であったのである。当時カフェらしい家を探すのには難儀した。東京のどこにもそんな家はなかった。それで僕は或日曜一日東京中を歩いて（尤も下町でなるべくは大河の見えるような処というのが注文であった。河岸になれば下町情調の濃厚なところで我慢しようというのであった。）とに角両国橋手前に一西洋料理を探した。」<sup>1)</sup> 隅田川河畔の下町で江戸情緒を感じ、西洋料理屋で西欧を感じるという条件を満たす会場が、「パンの会」会場として採されたことがわかる。そして、このようにしてまず、採じだされた会場が、両国橋に近い「第一やまと」という店であったが、会場は時期によって変わっていった。また、「パンの会」は、当初、毎月第2、第4土曜日の開催という原則を立てて開催され、加えて春秋2回の大会も開催された。

出席者は、木下杢太郎、北原白秋、石井柏亭、山本鼎らの常連に加え、会により異同がある。野田宇太郎の『日本耽美派文学の誕生』（河出書房新社 1975）に依ると、会場は以下のような場所で開催されている。<sup>2)</sup>

### 第一やまと

場所：現 東京都中央区東日本橋1-10あたり

開催期間：「パンの会」第1回目の1908年（明治41）12月15日（土）から1909年（明治42）3月ころまで

会場：隅田川畔にあった料理店。「パンの会」最初期の会場。野田宇太郎は次のように記している。「両国の橋に近い両国公園にあって、よく学生の会合などを催していた西洋館まがいの三階建ての第一やまとであった。もともと牛鍋屋ではあったが、西洋料理も酒も出した。あまり清潔な店ではなかったが、それでも大川端であることが、太田正雄（木下杢太郎）の心に一抹の満足感を与えた。」<sup>3)</sup>

代表的な会：第1回目の出席者とその時の年齢は以下のとおりである。木下杢太郎23歳、北原白秋23歳、吉井勇22歳、石井柏亭26歳、山本鼎26歳、森田恒友27歳。

### 永代亭

場所：現 東京都江東区佐賀1-2あたり

開催期間：1909年（明治42）ころ

会場：隅田川の永代橋のたもとにあった料理店。野田宇太郎は、永代亭について次のように記している。「（木下杢太郎は、）また同時に、深川の永代橋際にあった隅田川汽船の発着所二階の永代亭をもみついていた。永代亭は第一やまとよりはいくらかよかったが、それでもあまり清潔でない大衆食堂には違いなかった。その家が気に入ったのは大川の水際にあって、春から夏にかけての江戸的な情調にひたるには好都合であるという点である。」<sup>4)</sup>

代表的な会：1909年（明治42）4月10日（土）、永代亭での「パンの会」は、春の「大会」として開催された。20名ほどの文学者、美術家が集まった。特別ゲストとして、すでに訳詩集『海潮音』を上梓していた上田敏（京都帝国大学文学部教授）が、戸川秋骨と出席し歓待された。会の終了後、酔った山本鼎と倉田白羊が永代橋の欄干に登り、そこから小便をするといった若者らしいエピソードもある。この会の時に、深川警察署の2名の私服刑事が、「パンの会」を社会主義者の集まりと誤解し、偵察したといううわさも残る。幸徳秋水が訳したクロボトキンの『<sup>ばん</sup>麵麴の略取』（無政府共産主義社会について記された本）が、平民社訳として出版されたのが1909年（明治42）1月25日である。この本を、内務省に届けたところ、翌日警部と刑事がやって来て、訳本を押収され、社会運動家であり、この本の刊行者である坂本清馬は、出版法違反で起訴され、罰金三十円の判決を受けた。

### 松本楼

場所：現 東京都千代田区日比谷公園

開催期間：1909年（明治42）10月23日（土）

会場：松本楼は、日本初の洋風近代式公園、日比谷公園の中に、1903年（明治36）開業した西洋風レストラン。1909年（明治42）10月23日（土）の松本楼での「パンの会」は、特別な「大会」として開催された。文学者や美術家だけでなく、音楽家、演劇家、評論家、新聞記者など多数が出席した。また、この会は、初期から「パンの会」に出席していた若い芸術家、フリッツ・ルンプのドイツ帰国の送別会でもあった。北原白秋が自作の「おかる勘平」の朗読をしている。

### 三州屋

場所：現 東京都中央区日本橋大伝馬町6あたり

開催期間：1910年（明治43）ころから1912年（明治45）ころまで

会場：隅田川には面していないが、下町の洋風館のレストラン。木下杢太郎は、三州屋について次のよ

うに回想している。「小伝馬町の三州屋という西洋料理屋だった。ここはきつすいの下町情調の街区で古風な問屋が軒を並べている処で、其家はまた幾分第一国立銀行時代の建築の面影を伝えている西洋館であったから、我々は大に気に入った。おかみさんが江戸ッ児で、或る大会の時には葎町の一流の芸者などを呼んでくれて、我々は美術学校に保存してある「長崎遊園の図」を思い出して、喜んだものである。」<sup>5)</sup>

代表的な会：1910年（明治43）11月20日（土）の「パンの会」は、秋の「大会」として開催された。石井柏亭の洋行、長田秀雄、柳啓助の入隊を祝う会として開催された。「三田文学」、「白樺」、「新思潮」の同人の多くが出席した。谷崎潤一郎と永井荷風の初対面もこの大会においてであった。また、長田秀雄、柳啓助の入隊を祝すビラ札に、高村光太郎が黒枠をつけ、それを萬朝報の記者が非国民として避難するという、いわゆる「黒枠事件」が起こったのがこの会である。

#### よか楼

場所：現 東京都台東区雷門1あたり

開催期間：1911年（明治44）ころ

会場：浅草にあったレストラン。野田宇太郎は、よか楼について、次のように記している。「浅草のよか楼というのは雷門前並木通りにあった三階建の塔のようなレストランであった。」<sup>6)</sup>

代表的な会：1911年（明治44）2月12日（土）よか楼で開催された「パンの会」は盛況で、約40名が出席した。

## （2）木下杢太郎

### ①木下杢太郎

木下杢太郎（1885年（明治18）～1945年（昭和20））は、静岡県賀茂郡湯川村（現：伊東市湯川）に生まれた、詩人、劇作家、皮膚科の医学者である。

実家は「米惣<sup>こめそう</sup>」という商家で、資産家であった。杢太郎は地元の小学校を卒業後、家族の強い勧めにより医者を目指すために上京し、第一高等学校、東京帝国大学医科大学に進み、皮膚科の医学者として多くの実績を残した。

杢太郎は、文学や美術に強い関心を持っており、大学在学中には与謝野寛、晶子が主宰していた新詩社に参加し、「明星」に多くの作品を発表した。新詩社脱会後、北原白秋や「方寸」の画家たちと「パンの会」を結成し、文芸誌「屋上庭園」を発刊した。また、森鷗外の観潮楼歌会にも出席し、公私にわたり医師でもある鷗外の指導を得た。この時期の10年間（1907年（明治40年）～1916年（大正5））が彼の文芸活動の最盛期であり、耽美派の詩人として北原白秋と並び称された。また、生涯にわたって、随筆・評論などを遺し、文化面で幅広く活躍したが、また、皮膚科の医師としても優れた業績を遺している。杢太郎の生家が、木下杢太郎記念館（伊東市湯川二丁目11番5号）となっている。

### ②木下杢太郎の「パンの会」時代の詩

「パンの会」が開催された時期に、木下杢太郎が書いた詩は、『食後の唄』（アララギ 1919年（大正8）

12月)に収められている。「食後の唄」とは、デザート代わりの詩という意味。空太郎は、『食後の唄』の序で、「街頭<sup>アフィッシュ</sup>の張札を愛し、料理屋の色紙の印刷を愛し、モンマルトル画家の漫画を愛し、時花唄<sup>はやりうた</sup>、竹枝、chanson de la rueを愛するを知った予が、こいつを一番小唄でやろうと考えせさたの悪い思い付きであった。」と記している。「悪い思い付き」というのは逆説である。『食後の唄』は、パンの会当時の空太郎の美学であった、近代の都会趣味的なダンディズムと江戸情緒を小唄調で詠った詩集であった。「えどはくカルチャー」では、その中から「兩國」、「築地の渡し 竝序」、「金粉酒」、「珈琲」を紹介した。

## 兩國

りやうごく はし した  
兩國の橋の下へかかりや  
おほふね はしら たふ  
大船は檣を倒すよ、  
せんどう かけごゑ  
やあれそれ船頭が懸聲をするよ。  
ぐわついつか  
五月五日のしつとりと  
はだ つめ かは かげ  
肌に冷たき河の風、  
め く はやふね ゆるや ろ びやうし  
四ツ目から来る早船の緩かな艀拍子や、  
ぼたん そ はんてん てふへ なみ  
牡丹を染めた袴纏の蝶々が波にもまるる。

なだ びしゅ きくまさむね  
灘の美酒、菊正宗、  
うす ばり さかづき か も  
薄玻璃の杯へなつかしい香を盛つて  
レストラント かい  
旗亭の二階から  
ぼんやりとした、いり ひ ぞら  
ぼんやりとした、入日空、  
ゆめ こくぎくわん まる や ね  
夢の國技館の圓屋根こえて  
とほ と とり ゆふとり かげ み  
遠く飛ぶ鳥の、夕鳥の影を見れば  
こゝろ  
なぜか心のこがるる。

## 【鑑賞】

- ・1910年(明治43)5月制作。初出「三田文学」(1910年(明治43)7月)。『食後の唄』(アララギ 1919年(大正8)12月)所収。
- ・西洋料理店の2階から見渡す、5月の隅田川の風情を描いた詩。この詩には、西洋料理店の名前は記されていないが、「パンの会」が開催された第一やまがモデルになっていると思われる。「パンの会」の会場が詩になっている数少ない作品。
- ・この詩には、隅田川を行き交う舟に象徴される江戸情緒と、鉄橋である兩國橋、西洋料理舗<sup>レストラント</sup>、国技館の円屋根など近代的な都会の風景がバランスよく融合され、それを背景に、青年の哀愁が表現されている。空太郎は、5月の風物を深く愛し、多くの詩にしており、この「兩國」もその一つ。



- ・当時、両国橋下流から東方向にのびる豎川の四ツ目橋に近い牡丹園（「本所四ツ目芍薬園」現：江東区毛利1丁目21番地あたり）まで乗合いの船が出ており、船頭は、蝶々と牡丹を染め抜いたそろいの半纏を着ていた。また、1909年（明治42）6月、建築家、辰野金吾と葛西萬司の設計で、日本初のドーム型鉄骨板張の国技館が建てられ、「パンの会」会場の第一やまとの2階から眺められた。

## 築地の渡し 並序

つき ち わた あかしちやう い 築地の渡しより明石町に出づれば、あなたの岸は月島、また佃島燈ところじへ。實に夜の川口の眺めはパン會勃興當時の藝術的感興の源にてありき。永代橋を渡つての袂に、當時永代亭といへる西洋料理屋ありき。その二階の窓より眺むるに、春月の宵などには川の面鍍金したるがごとく銀白に、月影往々その上に激瀧たる光を流しぬ。かゝる折しもあれや、一艘の小さき舟來る。形あたかも陰畫の如く、白光の面に劃然たる黑影を現して、舟中の人々の拳を闘はし嬉遊する様、眞に滑稽の極みにてありき。我等パン會同志は屢この家の階上に集ひてパンを祭るの酒宴を開きたり。

ばうしやうがよ 房州通ひか、伊豆ゆきか、  
ふえ きこ 笛が聞える、あの笛が。  
わた つくだじま 渡しわたれば佃島。  
われら かいじやう つど メトロポオルの燈が見える。

## 【鑑賞】

- ・初出「スバル」（1910年（明治43）2月）。『食後の唄』（アララギ 1919年（大正8）12月）所収。「序」は、初出の際はなく、『食後の唄』刊行の際、付けられた。
- ・「序」において、永代亭で「パンの会」を開催していた当時の隅田川河口の江戸情緒濃厚な風景が回顧される。詩の部分で、隅田川河口から房州や伊豆へ向かう汽船と築地にあったホテルが小唄調で唄われる。これも、「パンの会」の会場である永代亭の様子が書かれた数少ない詩。
- ・時代の先端を行く、汽船やホテルと、江戸時代の生活様式を強く残していた佃島近辺の風情を描き、江戸情緒と近代の風景、双方が共存する東京を小唄調で唄う。この詩は、当時流行のラップ節で歌われたという。（ラップ節については、北原白秋の「空に真赤な」参照）
- ・「房州通ひか、伊豆ゆきか、／笛が聞える、あの笛が。」とあるのは、霊岸島（現：東京都中央区新川。永代橋のすぐ南側の隅田川西岸。）から出発して、房州や伊豆諸島などに向かう汽船の汽笛のこと。木下杢太郎は、1906年（明治39）4月、房州に旅に出ており、この汽船で行ったと思われる。「メトロポオル」は、明石町海岸にあったホテルで、1890年（明治23）、築地外人居留地一番に開業した。

## 金粉酒

オ オ ド キイ ド ダン チ ッ ク  
Eau-de-vie de Dantzick.

こがねう  
黄金浮く酒

お お、<sup>ごぐわつ</sup>五月、<sup>ごぐわつ</sup>五月、<sup>リケエルグラス</sup>小酒盞、

わが酒舗の<sup>バ ア</sup>彩色<sup>ステンドグラス</sup>玻璃、

まち<sup>あめ</sup>にふる雨の<sup>むらさき</sup>紫。

をんなよ、<sup>バ ア</sup>酒舗の女、

そなたはもうセルを<sup>き</sup>着たのか、

その<sup>うす</sup>薄い<sup>あめ</sup>藍の<sup>しま</sup>縞を？

まつ<sup>しろ</sup>白な<sup>ぼたん</sup>牡丹の<sup>はな</sup>花、

さ<sup>さ</sup>は<sup>こ</sup>るな、<sup>こ</sup>粉が<sup>ち</sup>散る、<sup>にほ</sup>匂ひが<sup>ち</sup>散るぞ。

おお<sup>ごぐわつ</sup>五月、<sup>ごぐわつ</sup>五月、そなたの<sup>こゑ</sup>聲は

あまい<sup>きり</sup>桐の花の<sup>はな</sup>下の<sup>した</sup>堅<sup>フリウト</sup>笛の<sup>ね</sup>音色、

わかい<sup>くろねこ</sup>黒猫の<sup>け</sup>毛のやはらかさ、

おれの<sup>こゝろ</sup>心を<sup>と</sup>溶かす<sup>につぼん</sup>日本の<sup>さ</sup>三<sup>み</sup>味<sup>せん</sup>線。

オ オ ド キイ ド ダン チ ッ ク  
Eau-de-vie de Dantzick.

ごぐわつ<sup>ごぐわつ</sup>  
五月だもの、五月だもの ——

## 【鑑賞】

- ・1910年(明治43)5月制作。初出「三田文学」(1910年(明治43)7月)。『食後の唄』(アララギ 1919年(大正8)12月)所収。
- ・雨の降る都会のバーで、5月の憂愁を詠う詩。西欧と日本が混在した雰囲気の中、酒に酔いながら5月の季節感を五感で感じている。
- ・杳太郎は、『食後の唄』の序において、日本橋の小網町の「鴻の巣」という酒場で、そこの主人から様々な酒の話聞き、それを刺激にして「該里酒」、「金粉酒」、「兩國」、「薄荷酒」などの詩を作ったと記している。
- ・<sup>オ オ ド キイ ド ダン チ ッ ク</sup>Eau-de-vie de Dantzickは、旧ドイツ領のポーランドの都市ダンツィヒで生産されたブランディで、それに金粉が混じっているので「金粉酒」という。<sup>オ オ ド キイ</sup>Eau-de-vieとは、フランス語で、直訳すれば「火の水」。ブランディのこと。「セル」は、薄地の毛織物で、絹や綿の混紡もある。一重の着物に仕立てて着ることが多く、感触は柔らかく、春先や秋口など季節の変わり目に着用する。

珈琲

いま  
今しがた

すい  
啜つておいた

モ カ ど こ  
Mokkaのほひがまだ何處やらに

のこ  
残りゐるゆゑうら悲し。

くも そら  
曇つた空に

ときへ あめ くわつ よる ひや  
時々は雨さへけぶる五月の夜の冷さに

き  
黄いろく にじむ 華電氣、

しゅえん ざつだん くる じやうそう  
酒宴のあとの雑談のやや狂ほしき情操の—

さりとて別にこれといふゆゑも無けれど、

うら懐しく

なん ふる こひ かた  
何となく古き戀など語らまほしく

ちつ  
寂としてゐるけだるさに

あて み い しろ しょくたく  
當もなく見入れば白き食卓の

じ はながめ うすくれなゐ ほたん はな  
磁の花瓶にほのぼのと薄紅の牡丹の花。

カフェエ カフェエ にが カフェエ  
珈琲、珈琲、苦い珈琲。

【鑑賞】

- ・1910年(明治43) 5月制作。初出「三田文学」(1910年(明治43) 7月)。『食後の唄』(アララギ 1919年(大正8) 12月) 所収。
- ・雨の降る5月の夜、酒宴の後に皆と喫茶店に行き、さめやらない熱気の中でコーヒーを飲むが、次第に自分だけの世界に入ってゆき、けだるい憂愁を味わうという詩。味覚、触覚、視覚、聴覚、嗅覚といった五感すべてで感じられたことが書かれており、感覚的な作品になっており、都会的な印象を与える。この酒宴は、現実的な事実に対応させれば、「パンの会」が考えられ、「パンの会」の雰囲気を想像させる作品でもある。
- ・「<sup>すい</sup>吸つておいた」は、「コーヒーを吸って、そのカップをテーブルの上に置いた」の意味。「華電気」は、反射笠に彩色硝子を使用した電灯。

### (3) 北原白秋

## ①北原白秋

北原白秋（1885年（明治18）～1942年（昭和17））は、福岡県山門郡沖端村（現：柳川市沖ノ端町）<sup>やま と おきの はた</sup>に生まれた詩人、歌人、童謡作家である。生家は、九州一帯に知られた海産物問屋であった。その地域は、水郷として特異な風物を誇り、また、切支丹や南蛮文化が早くから流入した場所でもあった。中学の頃より短歌を作り、1904年（明治37）、20歳のとき上京し、早稲田大学英文科予科に入学する。1906

年（明治39）、与謝野鉄幹の招きで新詩社に入り、「明星」新人の筆頭となる。1907年（明治40）には新詩社を脱会し、1908年（明治41）、木下杢太郎らと「パンの会」を起し、当時、文壇を支配していた自然主義に対抗する耽美派文学の一先端となった。また、1909年（明治42）、「明星」出身者たちは、森鷗外を顧問とする「スバル」を創刊したが、白秋もその一人として加わり、新鮮な感覚の詩を発表した。

異国情緒にあふれた『邪宗門』（易風社 1909年（明治42）3月）、故郷柳川などを詠った『思ひ出』（東雲堂書店 1911年（明治44）6月）、「パンの会」での耽美的芸術活動を背景に東京を詠った『東京景物詩及其他』（東雲堂書店 1913年（大正2）7月）は、白秋の青春時代の代表的詩集で、豊饒な官能と感覚にあふれている。

北原白秋は、生涯を通じて、詩壇の中心的人物として、詩、短歌、童謡など広範多彩な文学活動を展開した。北原白秋記念館が、福岡県柳川市沖端町55-1にある。

## ②北原白秋の「パンの会」時代の詩

「パンの会」が開催された期間に書かれた詩は、『邪宗門』、『思ひ出』、『東京景物詩及其他』に収められている。また、歌集として『桐の花』（東雲堂書店 1913年（大正2）1月）がある。えどはくカルチャーでは、その中から、「空に真赤な」、「公園の薄暮」、「新聞紙」、「おかる勘平」を紹介した。なお、本稿では、「おかる勘平」は直接都市を描いていないので割愛した。

### 空に真赤な

そら まつか くも  
空に真赤な雲のいろ。

はり まつか さけ いろ  
玻璃に真赤な酒の色。

なんでこの身が悲しかろ。

そら まつか くも  
空に真赤な雲のいろ。

### 【鑑賞】

- ・1908年（明治41）5月に作られた詩。初出は「八少女」2巻1号（1909年（明治42）1月）。『邪宗門』（易風社 1909年（明治42）3月）所収。
- ・赤い夕焼け雲とグラスに注がれた赤い酒、そして、悲しい気持ちを小唄調に詠う。赤い夕焼け雲やグラスに注がれた赤い酒をとおして、夕刻のアンニュイな青年の気持ち（「なんでこの身が悲しかろ」という逆説的な台詞によって現わされている）を、リズムカルな小唄調にし、あえて軽く詠いあげることによって、青年の複雑な心情を現わす。
- ・野田宇太郎によれば、「空に真赤な」は、日露戦争後の当時流行していたラッパ節に合せて、夕刻から始まる「パンの会」で合唱されていたという。<sup>7)</sup> ラッパ節は、日露戦争が終結した1905年（明治38）から歌い出され、数年にわたって大流行した流行歌。多くの替え歌があるが、演歌師の添田唾蟬坊によるものなど、戦いには勝ったものの、多くの犠牲者を出した日露戦争に対する厭戦、反戦の思

いが歌われるものが多かった。

## 公園の薄暮

ほの青き<sup>ぎんいろ</sup>銀色の<sup>くうき</sup>空気に、  
そことなく<sup>ふきあげ</sup>噴水の水はしたたり、  
<sup>うすあかり</sup>薄明ややしばしさまかえぬほど、  
ふくらなる<sup>ボ</sup>羽毛<sup>ア</sup>頸巻のいろなやましく女ゆきかふ。

つつましき<sup>かれくさ</sup>枯草の<sup>しめ</sup>湿るにほひよ……  
<sup>まろがた</sup>円形に、あるは<sup>だ</sup>楕円<sup>えん</sup>に、  
<sup>かぎ</sup>劃られし<sup>その</sup>園の<sup>はい</sup>配置<sup>ち</sup>の<sup>き</sup>黄にほめき、<sup>うす</sup>靄<sup>アアクとう</sup>に三つ四つ  
色淡き紫の弧燈したしげに光うるほふ。

春はなほ見えねども、<sup>その</sup>園のところに  
いと甘き<sup>ちんてう</sup>沈丁の<sup>にが</sup>苦き<sup>つぼみ</sup>茗の  
<sup>さ</sup>刺すがごと<sup>し</sup>沁みきたり、<sup>ガス</sup>瓦斯の<sup>うすき</sup>薄黄は  
身を投げし<sup>たましひ</sup>霊のゆめのごと水のほとりに。

暮れかぬる<sup>でんしゃ</sup>電車のきしり……  
<sup>しを</sup>凋れたる<sup>てうわ</sup>調和にぞ<sup>しゅうだうめ</sup>修道女の<sup>ひとり</sup>一人消えさり、  
<sup>さばき</sup>裁判はてし<sup>こうそあん</sup>控訴院に<sup>るすゐ</sup>留守居らの<sup>とも</sup>点<sup>あかり</sup>す燈は  
<sup>つか</sup>疲れたる<sup>がらす</sup>硝子より<sup>ヒステイリ</sup>弊私的<sup>ひとみ</sup>里の<sup>はな</sup>瞳を放つ。

いづこにかすずろげる春の<sup>あんし</sup>暗示よ……  
<sup>ものかげ</sup>陰影のそこここに、やや強く<sup>かぎ</sup>光劃りて  
<sup>いき</sup>息ふかき<sup>アアクとうかれ</sup>弧燈<sup>その</sup>枯くさの園に歎けば、  
<sup>おもき</sup>面黄なる<sup>びやうじかす</sup>病児幽かに<sup>まよ</sup>照らされて迷ひわづらふ。

<sup>おほろ</sup>朧げのつつましき<sup>にほひ</sup>匂のそらに、  
なほ<sup>たへ</sup>妙にしだれつつ<sup>ふきあげ</sup>噴水の<sup>といき</sup>吐息したたり、  
<sup>あたら</sup>新しき<sup>つきかげ</sup>月光の<sup>ちんてう</sup>沈丁に<sup>し</sup>沁みも<sup>ひ</sup>冷ゆれば  
<sup>くわんのう</sup>官能の<sup>うす</sup>薄ら<sup>ぎんてき</sup>あかり<sup>よ</sup>銀笛の夜とぞなりぬる。

## 【鑑賞】

- ・1909年（明治42）2月に作られた詩。初出「スバル」3号（1909年（明治42）3月）。『東京景物詩及其他』（東雲堂書店 1913年（大正2）7月）所収。
- ・洋風近代公園の日比谷公園、近代国家の象徴である控訴院を背景に、春の夕暮れ時の都会の憂愁を、視覚、嗅覚、聴覚、触覚など研ぎ澄まされた感覚で詠った詩。
- ・日比谷公園は、1903年（明治36）6月1日に開園した、日本で最初の洋風近代公園。幕末までは松平肥前守などの屋敷地であったが、明治時代に陸軍練兵場となり、その後、帝都の中央公園として造成され、新政府の欧化政策の象徴となった。1909年（明治42）10月23日（土）の「パンの会」は、日比谷公園の中にある洋風喫茶店、松本楼で開催されている。
- ・「控訴院」は、1895年（明治28）に竣工したドイツ・ネオバロック様式の法省庁舎。お雇い外国人のドイツ人建築家ヘルマン・エンデ（Hermann Gustav Louis Ende）とヴィルヘルム・ベックマン（Wilhelm Böckmann）の基本設計による。日比谷公園のそばにある。
- ・『東京景物詩及其他』は、「東京に江戸の情調を加味したる印象風の景物詩」<sup>8)</sup>を集めた詩集。『邪宗門』、『思ひ出』、『桐の花』など白秋の当時の詩歌集の題名とは異なった、いささか事務用語的な題名も計算されたものではあろうが、近代の新しい東京を新しい感覚で描こうとした意思がうかがえる。

## 新聞紙

一九一〇、六月、はじめの月曜  
冷めたい朝の七時、  
つつましい駟者台のうへに、  
ただひとり爽かに折りかへす新聞紙の  
緑の薄い反射……

微かな鉄分をふくんだ空氣に  
まだ青味を帯びた棕櫚の花が  
かよわい薄黄色に光り、  
ちらほらと夏帽子の目につく  
なつかしいだらだら坂の下  
H分署の前の通……せわしい電車の鐸……

撒水夫の唧筒を動かすさびしさ、  
壕端の火の消えた瓦斯燈に  
白マントルが顫へ、  
その硝子の一点に日光の金が光つてゐる。

わかい<sup>ぎよしや</sup>駈者は  
窓<sup>まど</sup>のないカキ色<sup>いろ</sup>の囚人<sup>しうじん</sup>馬車<sup>ばしや</sup>を  
梧桐<sup>あおぎり</sup>のかげにひき入れたまま、  
しづかに<sup>よ</sup>読み<sup>ふけ</sup>耽る……

こころもち<sup>つか</sup>疲れた<sup>うま</sup>馬<sup>こきふ</sup>の呼吸……  
短く<sup>みじか</sup>刈<sup>か</sup>つた栗毛<sup>くりげ</sup>の光沢<sup>つや</sup>から沁<sup>し</sup>み出<sup>で</sup>る  
臭<sup>にお</sup>の奇<sup>ふし</sup>異<sup>ぎ</sup>な汗<sup>あせ</sup>ばみ、その上<sup>うへ</sup>にさしかくる  
新聞紙<sup>しんぶん</sup>の<sup>し</sup>新<sup>あた</sup>しい<sup>しよく</sup>触<sup>かん</sup>感、  
わか葉<sup>ば</sup>の<sup>うす</sup>薄<sup>みどり</sup>い<sup>はん</sup>緑<sup>しや</sup>の<sup>うへ</sup>反<sup>さ</sup>射。

新<sup>あた</sup>しい<sup>きやく</sup>客<sup>ま</sup>を待<sup>あひ</sup>つ間、  
やすらかな<sup>ふん</sup>五<sup>じ</sup>分<sup>す</sup>時<sup>す</sup>が過<sup>す</sup>ぎゆく……

#### 【鑑賞】

- ・1910年（明治43）6月に作られた詩。初出「文章世界」5巻8号（1910年（明治43）6月）。（「夏の市街」4編の中の1編）。『東京景物詩及其他』（東雲堂書店 1913年（大正2）7月）所収。
- ・1910年（明治43）6月の早朝、囚人馬車の若い駈者が、運ぶべき囚人が来る前に新聞を読み耽っている。その様子が、初夏の朝の爽やかな自然（微かな鉄分をふくんだ空気、まだ青味を帯びた棕櫚の花）と、都会の最新のさまざまな道具立て（電車の鐸、撒水夫、瓦斯燈、白マントル）の中で、極めて感覚的に描かれる。
- ・「だらだら坂の下」は、皇居お壕端一辺の三宅坂で、「H分署」の「H」は、「日比谷」の頭文字。「分署」は「警察分署」。これらのことから日比谷が舞台となっている詩であることがわかる。
- ・「新聞紙」、「一九一〇、六月、はじめの月曜」、「囚人馬車」ということばから、この詩が、大逆事件について書かれたものであることが推定できる。「新しい客」とは、幸徳秋水を指し、場所も、日比谷公園のそばにある控訴院近辺に絞り込むことができる。1910年（明治43）6月1日、幸徳秋水は、大逆事件において神奈川県湯河原温泉で逮捕され、同日、東京の新橋駅に護送され、そこから日比谷の東京地方裁判所の予審廷に連れ込まれた。翌日午前2時ころまで、そこで取り調べを受け、市ヶ谷富久町の東京監獄に護送されている。この詩の第1行目に、「一九一〇、六月、はじめの月曜」とあるが、その日の朝刊に、大逆事件についての何らかの報道があったと推測できる。幸徳秋水は、有罪・死刑判決を受け、他の死刑囚とともに翌年の1月24日処刑された。
- ・大逆事件を示す言葉は、直接は使っておらず、それは、発禁処分などを回避する手段であったと思われる。北原白秋は、詩「おかる勘平」を詩誌「屋上庭園」第2号（屋上庭園発行所 1910年（明治43）2月）に掲載した際、詩句「<sup>うちもも</sup>顫えていた男の内股と吸わせた唇と、」の部分が、風俗紊乱の理由により、発売禁止にさせられており、当局の厳しさを知っていたのである。

## おわりに

「パンの会」という明治後期の若い芸術家たちの懇談会の概要と、「パンの会」の主要な文学者であった木下杢太郎と北原白秋が、「パンの会」の様子や、当時の東京を描いた詩を紹介した。最後に、「パンの会」について補足を加えておく。

まず、「パンの会」が開催された時代の若者文化についてである。坂田稔『ユースカルチャー史 若者文化と若者意識』（勁草書房 1979）によると、パンの会が開催された1908年（明治41）から1912年（明治45）までを含めた明治後期は、青年たちが、「個人主義」、「自我主義」という新しい生き方を模索した時代であった。明治後期、国家の法体制は整備され、既成秩序が固定化され、また、資本主義経済が成立する。さらに、日清・日露戦争の勝利などにより富国強兵という国家目標が一応達成され、時代は一段落し、国家としての目標が次第に失われてゆく。そのようななかで、青年たちは国家の目標から離れ、生きる価値を自己の内面に見出そうとしてゆく。国家や社会に参加することなく、自己を第一義に考え、個人的な逸楽を求める立場をとるようになったのである。耽美主義的な「パンの会」も、社会的に見ればそのような個人主義の時代を反映する運動であったと見ることができる。

このような状況を象徴するものが、1908年（明治41）10月14日に発布された「<sup>ほしんしょうしょ</sup>戊申詔書」である。この詔書は、日露戦争後の資本主義発展にともなう個人主義・自然主義・社会主義思想の台頭に対し、勤労・勤儉の勧めと奢侈の戒めを主な内容として発布されたもので、教育勅語とともに国民への浸透がはかられた。

1909年（明治42）4月10日（土）に永代亭で開催された「パンの会」では、深川警察署の2名の私服刑事が、「パンの会」を社会主義者の集まりと誤解し偵察したと言われている。また、1910年（明治43）11月20日（土）に三州屋で開催された「パンの会」では、「黒粋事件」といって、長田秀雄、柳啓助の入隊を祝すビラ札に、高村光太郎が黒粋をつけ、それを萬朝報の記者が、「パンの会」を非国民として避難する事件が起こっている。これらは、青年たちが個人主義的に生きようとしている一方、国家権力や世情がきわめて保守的になっていることを示している。「パンの会」は、個人の美意識を追求する耽美的な芸術運動であったが、「パンの会」を取り巻く社会状況は、極めて保守的・強権的で、彼らには厳しいものであったのである。

「パンの会」について、加えるべきもう一つのことは、「パンの会」自体の賑やかさ、放縦さと、木下杢太郎や北原白秋など「パンの会」に参加していた若い芸術家たちの抱えていた憂愁の落差である。「パンの会」は、多くの芸術論が議論された賑やかな酒宴であったが、彼らの詩を読んでゆくと、若者たちの憂愁が深く感じ取られる。彼らの詩には、次第に資本主義化し、近代の矛盾を抱え始めた都市東京が、消えつつある江戸時代の風景とともに描かれており、時代の大きな転換期に遭遇した若者たちの無力ささえ見えてくる。「パンの会」とは、江戸から東京へと大きく転換してゆく明治後期に生きた若者たちの苦悩の場でもあったことがわかってくる。



## 2. 石川啄木と宮沢賢治

### はじめに

第2回目の講座では、石川啄木と宮沢賢治を取りあげた。2人とも、岩手県生まれで、東京と深く関わり、東京を描いた詩を残している。啄木は、後半生を東京で暮らし、明治後期の東京で文学活動を行った。また、宮沢賢治は、生活の基盤は故郷の岩手県にあったが、積極的に上京し、大正時代から昭和初期にかけて東京の新しい文化の摂取に努めた。石川啄木、宮沢賢治という岩手県出身の文学者が、それぞれどのように東京に関わり、どのように東京を描いたかを見ていった。

### （1）石川啄木

#### ①石川啄木

石川啄木（1886年（明治19）～1912年（明治45））は、岩手県南岩手郡日戸村（現：岩手県盛岡市玉山区日戸）に生まれた歌人、小説家、詩人、思想家。父一禎<sup>いってい</sup>は、日戸村曹洞宗日照山常光寺の住職、母はカツ。1887年（明治20）、一禎が、渋民村宝徳寺の住職となり、一家は渋民村に移る。現在、石川啄木記念館（岩手県盛岡市玉山区渋民字渋民9）が、この宝徳寺の隣地に建つ。啄木は盛岡中学校時代、文学への関心を抱き、「明星」を愛読して短歌に志す。1902年（明治35）、試験におけるカンニング行為が原因で盛岡中学を中退し、文学で身をたてるべく上京、新詩社の与謝野鉄幹、与謝野晶子と知遇を得る。しかし、東京での生活がなりたらず、健康も害し、翌年、故郷にもどる。1904年（明治37）、一禎が、宗費滞納のため住職罷免の処分を受け、以降、啄木は生活費を自らの手で得なければならなくなる。19歳の時、第1詩集『あこがれ』（小田島書房 1905年（明治38））を刊行し、詩人として知られるようになる。同年、堀合節子と結婚し、翌年から母校渋民小学校の代用教員をするのを皮切りに、職を求めている流浪の半生が始まる。1907年（明治40）には、北海道にわたり、函館、札幌、小樽、釧路と転々とする。1908年（明治41）、単身上京し、盛岡中学以来の親友、金田一京助の助けをかり窮乏の生活をしながら、自然主義風の小説を書くが、文壇では認められなかった。この間、「パンの会」の北原白秋や木下杢太郎と交わり、森鷗外の観潮楼歌会に出席したり、「スバル」の編集を一時行うなどし、独特の短歌を書く。1909年（明治42）には、朝日新聞社の校正係として勤務することになり、家族とともに本郷弓町で生活を始める。1910年（明治43）の大逆事件を契機に社会主義思想に接近し、社会思想をテーマとした詩や評論を書く。同年9月には、東京朝日新聞に「朝日歌壇」が設けられ、啄木は選者に抜擢され、また、同年12月には、第1歌集『一握の砂』（東雲堂書店）を刊行。1912年（明治45）4月、肺結核のため、小石川区久堅町の借家で死亡。享年26歳。死後、第2歌集『悲しき玩具』（東雲堂書店）が1912年（明治45）6月に刊行される。

#### ②石川啄木の東京

石川啄木は、1908年（明治41）、22歳のとき上京し、26歳で亡くなるまでの明治時代最後の4年間を東京で暮らした。現在の文京区内を転々とする借家住まいであった。生活的には、両親・妻子を抱え、

厳しい生活であった。当時の東京には、様々な都市問題が発生し、啄木は、独特の短歌や詩、評論で、都市生活の孤独や苦悩を表現した。

その4年間の居住地は、以下のとおりである。

せきしんかん  
赤心館 (現：文京区本郷5-5-6 旧：本郷区菊坂町82番地)

- ・1908年(明治41) 5月、啄木が上京してから、同年9月まで下宿した下宿屋。
- ・赤心館の主人夫婦は、岐阜県から、同郷の菊富士楼(のちの菊富士ホテル)主人羽田弥一を頼って上京し、羽田のすすめで隣に学生下宿屋、赤心館を営んだ。
- ・啄木の盛岡中学時代の先輩である金田一京助が、赤心館に下宿しており、金田一の口添えにより、啄木も赤心館2階の6畳間に下宿することとなった。しかし、下宿代不払いが原因となり、滞在126日  
で出ることとなる。金田一が、自分の蔵書売り払い、借金を皆済し、2人で、がいへいかんべっそう蓋平館別荘に移る。

がいへいかんべっそう  
蓋平館別荘 (現：文京区郷6-10-12 旧：本郷区森川町1番地新坂359号)

- ・1908年(明治41) 9月から、1909年(明治42) 6月まで、啄木が下宿した下宿屋。
- ・蓋平館別荘の主人、高木金太郎は、日露戦争の激戦地、蓋平で戦功があり、その一時賜金で下宿、蓋平館を始めた。蓋平館別荘もその高木が経営していたもので、下宿兼旅館であった。啄木の部屋は、3階の三畳半の9号室で、見晴らしが良かったという。啄木の生活難は続き、その打破のため東京朝日新聞校正係に就職し、蓋平館別荘に100円あまりの借金を金田一の保証で残したまま、喜之床に移る。
- ・蓋平館別荘跡地に、金田一京助の筆による「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」の歌碑が建っている。

きのとこ  
喜之床 (現：文京区本郷2-38-9 旧：本郷区弓町2-18番地 新井方)

- ・1909年(明治42) 6月から1911年(明治44) 8月まで、啄木が間借りした理髪店。
- ・「喜之床」の創始者、新井喜之助は、明治の初め、東京帝国大学前の「喜多床」で修行し、日本橋で開業したが、1879年(明治12)、中村喜太郎の店を譲り受け、弓町に移ってきた。1904年(明治37)、喜之助が死亡し、妻こうと、養子の弁治が後を継ぎ、1907年(明治40)店を新築した。その借金を払う助けに、2階の6畳2間を、啄木に貸すこととした。
- ・啄木は、1909年(明治42) 3月、朝日新聞校正係に就職し、生活のめどがついたため、函館の母と妻子から上京を強請され、やむなく蓋平館別荘を引き払い、「喜之床」に家族を迎えた。後に、啄木の父も上京し、一家5人の生活が始まる。また、妻節子と姑の不和から、一時、節子が実家に帰る事件もおき、啄木は生活と文学の調和を真剣に反省する。1910年(明治43)10月4日、長男、真一が誕生するが、生後3週間あまりで死去する。啄木自身も、1911年(明治44)2月には慢性腹膜炎のため入院する。8月には、理髪店という客商売であることから、大家から立ち退きを要請され、小石川区久堅町に移る。
- ・喜之床の家屋は、1980年(昭和55)、愛知県犬山市の明治村に移築復元された。

小石川区久堅町74-46 (現：文京区小石川5-11-7)

- ・1911年(明治44)8月から1912年(明治45年)4月に啄木が亡くなるまで住んだ借家。啄木終焉の地。

- ・喜之床の家主から、啄木一家の病気を理由に立ち退きを要請され、病に伏せていた啄木に代わり、妻の節子が探した借家。節子の妹の夫であり、啄木一家を物心両面にわたって支えた宮崎郁雨に宛ての手紙（1911年（明治44）8月8日）に啄木は「場所は静かだし、あたりに木も沢山ある。昨夜は座敷から正面の木立の上に月が上った。」と書いている。啄木の死後、妻節子は、1912年（明治45）4月までここに住んだ。

### ③石川啄木の短歌

石川啄木の短歌は、生前刊行された『一握の砂』（東雲堂書店 1910年（明治43）12月1日）と、死後刊行された『悲しき玩具』（東雲堂書店 1912年（明治45年）6月20日）にまとめられているが、その他、歌集に収められなかった短歌が数多く残されている。

啄木の短歌の特徴は、従来の短歌とは大きく異なり、心情の直截な表出がなされていることにある。また、形態的に、3行に分けて書く表記法も独特である。

啄木の短歌にみられる心情の率直な表出の背景には、1904年（明治37）ころ流行した、流行語などを取り入れて詠んだ新趣向の狂歌「へなぶり」がある。心情を戯画化、誇張して表現する狂歌で、そこに文学作品としての価値を成立させようとしたものである。啄木は、1909年（明治42）4月11日の「ローマ字日記」に次のように記している。（原文はローマ字）「例のごとく題を出して歌をつくる。みんなで十三人だ。選の済んだのは九時頃だったろう。予はこのごろ真面目に歌などを作る気になれないから、相変わらずへなぶってやった。その二つ三つ。わが髭の下向く癖がいきどおろし、この頃憎き男に似たれば。いつも逢う赤き上着を着て歩く、男の眼まなここのごろ気になる。ククと鳴る鳴草入れし靴はけば、蛙なりかわをふむに似て気味わろし。」与謝野晶子宅での歌会の様子で、このほか6首が記されている。啄木は、当時、厳しい時期を迎えていた。小説家として立とうとしていたが、なかなか認められず、浅草の十二階下の私娼窟に出入りし、つらさを紛らわしていた。ここで詠われている短歌には、「へなぶり」の要素はあるが、表面的な滑稽さに終わっておらず、真摯な心情の表出になっており、ここに啄木の短歌の特徴がある。

また、啄木の短歌の特徴は、3行書きであることであるが、それは、第1歌集『一握の砂』編集の最終段階ではじめて実現したものであった。その年の4月に、土岐善麿（哀果）が、第1歌集『NAKIWARAI』を出版しており、それが、ローマ字綴りの一首3行書きというもので、当時東京朝日新聞にいた啄木は、『NAKIWARAI』について批評を書いている。啄木の短歌の3行書きには、この『NAKIWARAI』の影響が考えられる。3行にすることで、短歌を分かち書きの詩に近づけるはたつきがあり、複雑な心情を表出する啄木の短歌に見合う形態でもあったのである。

啄木の短歌は、実生活に密着したものであり、いきおい当時の東京をうたった短歌が多くできた。「えどはくカルチャー」では、『一握の砂』と『悲しき玩具』から東京を詠った短歌を紹介した。なお、「えどはくカルチャー」では、故郷の渋民村や北海道時代を詠った短歌も紹介したがここでは割愛する。また、東京を詠った短歌も22首紹介したが、ここでは、その内、11首を紹介する。

『一握の砂』より

あさくさ<sup>よ</sup>  
浅草の夜のにぎはひに

まぎれ<sup>い</sup>入り

まぎれ<sup>い</sup>出で来し<sup>き</sup>さびし<sup>ころ</sup>き心

【鑑賞】

- ・ 初出「東京朝日新聞」1910年（明治43）3月18日。「曇れる日の歌（一）」5首中の1首。
- ・ 歌意「浅草の夜の賑わいの中に、まぎれ入り、またまぎれ出てきたあとの空しい心」
- ・ 上京後の小説創作活動に失敗して窮迫の生活を送っていた啄木にとって、盛り場浅草は、唯一、憂悶の心を慰める場所であった。当時の浅草は、東京随一の繁華街で、特に浅草六区には芝居小屋や映画館が立ち並び、庶民の娯楽の中心地であった。また、浅草のシンボルであった凌雲閣の下には私娼窟が広がり、啄木はそこに出入りしてつらさを紛らわした。

あさくさ<sup>りょううんかく</sup>  
浅草の凌雲閣のいただきに

うでく<sup>ひ</sup>  
腕組みし日の

なが<sup>に</sup>き  
長き日記かな

【鑑賞】

- ・ 未発表作品。初出が『一握の砂』。
- ・ 歌意「浅草の凌雲閣に登り、腕を組んで過した日のことを長々と日記に書いた。」
- ・ 浅草のシンボルであった凌雲閣が開業したのは、1890年（明治23）11月で、娯楽施設として栄えたのは、せいぜい開業後数年で、啄木が上京した1908年（明治41）ころには、すでに最盛期は過ぎていた。凌雲閣の下には私娼窟が広がり、啄木が浅草に通っていた明治40年代には、凌雲閣から投身自殺者が出ている。この作品がいつ書かれたかは不明であるが、すでに客の多くない凌雲閣の最上階の展望階で、ひとり孤独にものを思う姿に、自殺者の姿を重ね合せることもできる。また、「日記」とあるが、啄木の場合、凌雲閣下の私娼窟に通っていたころ書いた「ローマ字日記」を思い起こさせる。「ローマ字日記」において、啄木は、文学面、生活面双方で行き詰まった内面の吐露を行っている。

どこ<sup>たくさん</sup>ひと  
何処やらの沢山の人があらそひて

くじ<sup>ひ</sup>  
鬨引くごとし

われも<sup>ひ</sup>引きたし

【鑑賞】

- ・ 未発表作品。初出が『一握の砂』。

- ・歌意「大勢の人が集まって、争いながらくじを引いているようだ。私も、あの中に入ってくじを引きたい。」
- ・啄木の晩年、交友があった若山牧水は、啄木の死の翌々年に「石川啄木君の歌」という文章を書いている。（「創作」1914年（大正3）1月）そこに、牧水は、この歌について「いかにも不安な、おちつかぬ、寧ろ気味の悪い印象をこの一首から受ける。」と記している。都会には、様々な欲望がうずまくが、その様子は見苦しいものでもある。その中に自分から入っていきたいという心情は、確かに気味が悪く、病的な精神が感ぜられ、また、啄木の都会への強い執着も読み取れる。

あきや い  
空家に入り  
たばこ  
煙草のみたることありき  
ひとりあ  
あわれただ一人居たきばかりに

#### 【鑑賞】

- ・初出「スバル」1909年（明治42）4月号。初出は、「空家に入り煙草のみたることありき孤り在りたき切なる願ひに」。
- ・歌意「あわれなことであるが、1人でいる時間が欲しいばかりに、空き家に入り、煙草を一服吸ったことがあった。」
- ・誰からも何からも邪魔されず、静かな時間を過したいがために、空き家に入り込み、煙草を一服する間だけ一人になれたという、惨めな経験を自ら告白する歌。当時、啄木は、文学面、生活面双方で行き詰まっていたが、このような状況をつくり出す東京という都市の残酷さも表現されている。

なに  
何やらむ  
おだや めつき  
穏かならぬ目付して  
つるはし う むれ み  
鶴嘴を打つ群を見てゐる

#### 【鑑賞】

- ・初出「東京毎日新聞」1910年（明治43）4月24日。
- ・歌意「何事であるか、穏やかでない目付きをして、鶴嘴を打っている一群を見ている。」
- ・鶴嘴をふるって工事をしている人々が登場するが、明治後期、東京市では、様々な土木・建築工事が行われていた。江戸時代の町並みを、近代国家の都市にするため、大規模な都市改造が必要となり、国は、市区改正事業を開始した。「市区改正」とは、今でいう「都市計画」のことで、1889年（明治22）から開始され、1920年（大正9）まで続いた。この歌が発表された当時は、主に路面電車を開通させるための道路拡幅や上水道の整備が行われていた時期であり、急速に近代化する東京の様子がこの歌の背景にある。
- ・「穏かならぬ目付」をした人物や、「鶴嘴を打つ群」は、急速に近代化する東京で、余裕を失いとげと

げしい気持ちになっている人間を表現しているとも読める。

はたらけど

はたらけど猶<sup>なほ</sup>わが生活<sup>くらしらく</sup>楽にならざり

ぢつと手<sup>て</sup>を見<sup>み</sup>る

### 【鑑賞】

- ・制作は、1910年（明治43）7月26日。初出「東京朝日新聞」1910年（明治43）8月4日。「手帳の中より」5首中の冒頭歌。
- ・歌意「働いても働いても、生活はいっこうに楽にならない。そのような状況のなか、私は、じっと自分の手を見つめる。」
- ・啄木は、家族を養うため朝日新聞社で働くが、生活は楽にならない状況が続いていた。
- ・また、この頃、啄木は、大逆事件をきっかけに社会主義思想への関心を強めており、貧しい労働者階級を詠っているとも考えられる。

よごれたる煉瓦<sup>れんぐわ</sup>の壁<sup>かべ</sup>に

降りて融<sup>と</sup>け降りては融<sup>と</sup>くる

春<sup>はる</sup>の雪<sup>ゆき</sup>かな

### 【鑑賞】

- ・初出「朝日新聞」1910年（明治43）3月18日。「曇れる日の歌（一）」5首のうちの1首。
- ・歌意「春の雪が、銀座煉瓦街の汚れた煉瓦に降っては溶け、降っては溶けている。」
- ・啄木は、1909年（明治42）3月1日、東京朝日新聞に入社し、校正係となった。当時、朝日新聞社は、京橋区滝山町4番地（現：中央区銀座6-6-7）にあり、啄木にとっては亡くなるまでの3年間の職場だった。「煉瓦」とは、銀座煉瓦街の煉瓦。明治政府にとって、西欧諸国と結ばれた不平等条約の改正は最大の懸案事項であり、日本が文明国であることを示すため、様々な欧化政策がとられた。東京の町並みも近代的な都市に改造されてゆき、煉瓦によって作られた銀座煉瓦街もその一つで、1877年（明治10）に完成した。銀座煉瓦街には、朝野新聞社など新聞社も数多く入っていた。
- ・この作品が発表された時、銀座煉瓦街はすでに完成から30年以上がたっており、煉瓦街の壁も汚れており、そこに降る春の雪の哀愁という、新しい都市の情景が詠われている。

皮膚<sup>ひふ</sup>がみな耳<sup>みみ</sup>にてありき

しんとして眠<sup>ねむ</sup>れる街<sup>まち</sup>の

重<sup>おも</sup>き靴<sup>くつ</sup>音<sup>おと</sup>

### 【鑑賞】

- ・未発表作品。初出が『一握の砂』。
- ・歌意「深夜の森閑とした街を歩く足音は、大きく響き、耳だけでなく皮膚全体がその音を聞く。」
- ・深夜の都会の静けさが詠われている歌であるが、「重き靴音」とあることから、自分は疲労しており、そのため、かえって全神経が昂ぶり、全身が耳のように緊張しているのである。都会生活の過酷さが詠われている短歌でもある。
- ・啄木は、晩年の3年間、東京朝日新聞社に勤務していたが、3日に一晩の夜勤があった。

あら の かへ  
曠野より帰るごとくに  
かへ き  
帰り来ぬ  
とうきやう よ  
東京の夜をひとりあゆみて

### 【鑑賞】

- ・初出「創作」1910年（明治43）11月。
- ・歌意「東京の夜を一人歩いて、まるで曠野から帰ってくるように、家に帰ってきた。」
- ・前の「皮膚がみな耳にてありき・・・」と同様、疲労困憊して、東京の夜をひとり帰宅する様を詠った歌。東京が、「曠野」と表現されており、東京の生活のきびしさを詠った作品。

### 『悲しき玩具』より

い き  
呼吸すれば  
むね うち な おと  
胸の中にて鳴る音あり。  
こがらし おと  
凧よりもさびしきその音！

### 【鑑賞】

- ・未発表作品。初出が『悲しき玩具』。1911年（明治44）の晩秋から初冬にかけての作と推測される。
- ・歌意「呼吸をすれば、病気のため、肺で奇妙な音がする。その音は、木枯らしよりも寂しい響だ。」
- ・『悲しき玩具』最初の歌。啄木が、若山牧水に渡した歌稿にはこの歌はなく、編集に臨んだ土岐哀果が、啄木の遺品の中から発見した一葉の紙片に書かれていたもの。
- ・「胸の中にて鳴る音」とは、肺結核患者が自覚するラッセル音であろう。啄木は、結核にかかり、1911年（明治44）2月には、東京帝国大学の医科大学附属医院で手術を受けた。妻の節子も肺結核を患い、啄木の死の1年後、28歳で病死している。啄木の母カツも肺結核を発病し、啄木の死の37日前に病没している。日本では、結核が明治時代に入り増加しており、当時は、結核の決定的な治療法は確立されておらず、国民病とも呼ばれていた。

いつまでも歩いてゐねばならぬとき  
思ひ湧き来ぬ、  
深夜の町町。

#### 【鑑賞】

- ・ 初出「秀才文壇」1911年（明治44）1月。初出は、「いつまでも歩いてゐねばならぬとき 思ひ湧き来ぬ 深夜の都」。
- ・ 歌意「深夜、町をいつまでも歩いていなければならない思いが湧いて出てくる。」
- ・ 初出では「都」とあったのを、「町町」に変えている。今井泰子は、「「町町」が、一区画過ぎれば次の区画と暗闇から果てなく現われる東京の町並みを暗示。」と評釈している。<sup>1)</sup>
- ・ 「いつまでも歩いてゐねばならぬとき思ひ」という激しい焦燥感が詠われている。焦慮の原因は、生活苦などの個人的なものなのか、大逆事件のような社会的なものなのか、あるいは双方なのか、特定することはできないが、その焦燥感を、「深夜の町町」を「いつまでも歩」くことで紛らわすという、都会ならではの状況を詠った短歌。

#### ④石川啄木の詩

石川啄木は、東京で創作上の苦悩や生活の不如意を経験し、その経験を独特な短歌にして詠った。そして、晩年は社会主義に傾倒し、社会問題に関する詩や評論を書いた。

元来、啄木は、社会的な関心を強く持っていた人物であった。盛岡中学時代、1901年（明治34）、校内刷新の運動が起こり、授業ボイコットに発展し、啄木もその運動に関わった。また、翌年の1902年（明治35）には、八甲田山雪中行軍遭難事件を報じた「岩手日報」号外を友人たちと売り、その利益を足尾銅山鉱毒水事件の被害者へ義援金として送ったりしている。北海道時代には、「函館日日新聞」、「北門新報」、「小樽日報」、「釧路新聞」で記者などをして、新聞人として社会への目を養った。上京後は、小説や短歌を書く文学生活を送るが、生活は常に苦しく、そのような中、現実の社会の矛盾と不合理を覚知してゆき、社会問題に関する詩や評論を多く書くことになった。

1909年（明治42）10月、啄木の妻節子が、経済的な困窮や同居する義母との確執に耐えかね、長女京子をつれて盛岡の実家に帰る事件が起こった。これは、啄木に文学と生活の関係を根底から再考するきっかけを与え、評論「弓町より（食ふべき詩）」（「東京毎日新聞」1909年（明治42）11月30日、12月2日～7日）を書き、現実根ざした文学の創造を提唱した。そして、その実践とも言うべき詩編「心の姿の研究」5編を「東京毎日新聞」（1909年（明治42）12月12日、13日、16日、20日）に発表する。東京で生活する者の様々な感情や様相を口語自由詩によって現わした詩である。

1910年（明治43）には、大逆事件が起こり、政府は社会主義運動に大弾圧を加え、以降、社会主義運動は「冬の時代」と呼ばれる低迷期に入る。啄木はこの大逆事件に強い関心を抱いた。朝日新聞社に勤務していたこともあり情報を収集し、友人の歌人で弁護士でもある平出修から幸徳秋水の弁護士宛「陳弁書」を借用しこれを写しとるなどし、社会主義への理解を深めてゆく。そして、大逆事件について様々



な評論を書くが、時節柄、発表に至らなかった。<sup>2)</sup> また、社会問題を主題とした詩の作品集「呼子と口笛」を書く。制作は、1911年（明治44）6月15日から27日にかけてで、啄木最後の詩作品である。これらは、啄木の死後、友人の土岐哀果（善麿）によって、1913年（大正2）5月、東雲堂書店から刊行された『啄木遺稿』によって初めて紹介された。

「えどはくカルチャー」では、「心の姿の研究」から「夏の街の恐怖」を、「呼子と口笛」から「ココアのひと匙」と「飛行機」を紹介した。

## 夏の街の恐怖

焼けつくやうな夏の日の下に<sup>した</sup>  
おびえてぎらつく軌条<sup>れーる</sup>の心。  
母親<sup>お</sup>の居睡<sup>ねむ</sup>りの膝<sup>ひざ</sup>から<sup>すべ</sup>り下りて  
肥<sup>ふと</sup>った三歳<sup>みつ</sup>ばかりの男の児<sup>こ</sup>が  
ちょこ／＼と電車線路へ歩いて行く<sup>ゆ</sup>。

八百屋<sup>や ほ や</sup>の店には萎<sup>な</sup>えた野菜。  
病院の窓の窓掛は垂れて動かず。  
閉された幼稚園の鉄の門<sup>した</sup>の下には  
耳<sup>しろいぬ</sup>の長い白犬が寝そべり、  
すべて、限りもない明るさ<sup>なか</sup>の中に  
どこともなく、芥子<sup>け し</sup>の花が死<sup>し</sup>落<sup>にお</sup>ち  
生木<sup>なま き</sup>の棺<sup>くわん</sup>に裂罅<sup>ひび</sup>の入る夏<sup>い</sup>の空気<sup>き</sup>のなやましさ。

病身の氷屋<sup>おかもち</sup>の女房<sup>お</sup>が岡持<sup>おかもち</sup>を持ち、  
骨折<sup>かうもりがさ</sup>れた蝙蝠傘<sup>かど</sup>をさしかけて門<sup>いづ</sup>を出れば、  
横町の下宿から出て進み来る、  
夏の恐怖に物も言はぬ脚気患者<sup>かつけくわんじや</sup>の葬<sup>くわん</sup>りの列<sup>じや</sup>。  
それを見て辻<sup>つじ</sup>の巡査は出かゝつた欠伸<sup>あくび</sup>噛みしめ、  
白犬<sup>しろいぬ</sup>は思ふさまのびをして  
塵溜<sup>ごみため</sup>の蔭<sup>かげ</sup>に行く<sup>ゆ</sup>。

焼けつくやうな夏の日の下に<sup>した</sup>、  
おびえてぎらつく軌条<sup>れーる</sup>の心。  
母親<sup>お</sup>の居睡<sup>ねむ</sup>りの膝<sup>ひざ</sup>から<sup>すべ</sup>り下りて  
肥<sup>ふと</sup>った三歳<sup>みつ</sup>ばかりの男の児<sup>こ</sup>が

ちょこ〜と電車線路へ歩いて行く。

#### 【鑑賞】

- ・「心の姿の研究」の中の1遍で、「東京毎日新聞」1909年（明治42）12月12日に掲載された作品。
- ・真夏の白昼、倦怠感みなぎる状況を背景に、母親の膝からすべりおりた幼児の偶発事故が予感される「恐怖」が描かれる。都市の庶民がさらされる危機が、口語による散文的描写により描かれる。
- ・啄木は、1909年（明治42）6月、それまでいた下宿、蓋平館別荘を引き払い、本郷通りと春日通りが交差する本郷3丁目交差点の近くに位置する床屋を家業とする借家（「喜之床」）に移った。春日通りには、明治30年代には上野および神田方面から路面電車が開通し、多くの商店が並ぶ賑やかな場所であった。また、近くには、東京帝国大学や東京帝国大学医科大学附属医院もあり、「夏の日の恐怖」の舞台は、啄木が居住していた喜之床近辺に多く見いだせる。

#### ココアのひと匙

一九一一・六・一五・T O K Y O

われは知る、テロリストの  
かなしき心を――  
言葉とおこなひとを分ちがたき  
ただひとつの心を、  
奪はれたる言葉のかはりに  
おこなひをもて語らむとする心を、  
われとわがからだを敵に投げつくる心を――  
しかして、そは真面目にして熱心なる人の常に有つかなしみなり。

はてしなき議論の後の  
冷さめたるココアのひと匙を啜りて、  
そのうすにがき舌触りに、  
われは知る、テロリストの  
かなしき、かなしき心を。

#### 【鑑賞】

- ・1911年（明治44）6月15日に書かれ、「創作」（1911年（明治44）7月）に発表された。そして、『呼子と口笛』と題された、啄木自身が1911年（明治44）7月27日までにまとめたノートにおさめられた。『呼子と口笛』は、啄木の死後、土岐哀果（善麿）によって、『啄木遺稿』（東雲堂書店 1913年（大正2）

5月）におさめられた。

- ・ 激しい議論の後、ココアをすすりながら、理論と行動を一致させようとする純粋なテロリストを思う詩。国家権力の思想弾圧に抵抗するに、暗殺や暴力をもって行うテロリストに対して、啄木は否定的な立場をとっていたが、「かなしき心」という言葉から、テロリストに対する深い共感が読み取れる。
- ・ テロリストを主題にしたこの作品の背景には、大逆事件がある。天皇へのテロリズムを口実に社会主義者が捉えられ、処刑された事件である。この作品が書かれた時には、すでに幸徳秋水ら11人の死刑執行は執り行われていた。

## 飛行機

一九一一・六・二七・T O K Y O

見よ、今日も、かの蒼空に  
飛行機の高く飛べるを。

給仕づとめの少年が  
たまに非番の日曜日、  
肺病やみの母親とたった二人の家にて、  
ひとりせつせとリイダアの独学をする眼の疲れ……

見よ、今日も、かの蒼空に  
飛行機の高く飛べるを。

### 【鑑賞】

- ・ 1911年（明治44）6月27日に書かれ、『呼子と口笛』と題された、啄木自身が1911年（明治44）7月27日までにまとめたノートにおさめられた。『呼子と口笛』は、啄木の死後、土岐哀果（善麿）によって、『啄木遺稿』（東雲堂書店 1913年（大正2）5月）におさめられた。
- ・ 給仕勤めの少年が、少ない休日に英語の独学をするが、成功する公算は少なそうである。また、母親は、当時では、死病である肺病つまり結核にかかっている。都市における、貧しい家庭の様子を抒情的に描写した詩。
- ・ 日本で初めて飛行機が飛んだのは、1910年（明治43）と言われており、この作品が書かれた当時は、まだ試験飛行の域を出ていなかった。この飛行機を、少年の希望を象徴するものと見る見方もあるが、むしろ、飛行機という時代の先端からは見放された貧しい家庭の悲しさを強調する役目を果たしていると読める。

## (2) 宮沢賢治

### ①宮沢賢治

宮沢賢治(1896年(明治29)～1933年(昭和8))は、岩手県稗貫郡里川口村(現:岩手県花巻市)に、質・古着商を営む宮沢政次郎とイチの長男として生まれた。岩手県立盛岡中学校卒業後、盛岡高等農林学校で地質や土壌について学んだ。1917年(大正6)には、盛岡高等農林学校の校友たちと文芸同人誌「アザリア」を創刊し、短歌などを発表する。1918年(大正7)3月に盛岡高等農林学校を卒業し、研究生として同校に残る。1918年(大正7)12月、日本女子大学校在学中の、2歳年下の妹トシの病気看病のため、母と共に上京、翌年、トシの全快とともに花巻に帰る。1920年(大正9)研究生を終了。その後は、店番などをして家業を手伝うが、盛岡高等農林学校在学中より日蓮宗を信仰するようになっていた賢治は、1920年(大正9)10月、その信仰団体である国柱会に入会した。1921年(大正10)1月、店番中、頭の上の棚から日蓮聖人の遺文録が落ちてきたことを契機に、突如上京した。東京では、校正などで自活し、街頭で布教するという生活が続くが、同年8月、妹トシの病気の報に接し、帰郷する。この上京の期間、童話が書かれ始める。帰郷後、稗貫郡立稗貫農学校教諭に就任した。1922年(大正11)11月27日、妹のトシ死亡。激しい衝撃を受け、「無声慟哭」など、妹を悼む一連の詩を書く。1924年(大正13)4月、27歳の時、詩集である、心象スケッチ『春と修羅』(関根書店 1924年(大正13)4月)を自費出版する。また、同年12月には、イーハトヴ童話『注文の多い料理店』(杜陵出版部)を自費出版する。1926年(大正15)3月に、稗貫郡立稗貫農学校を辞職し、花巻市郊外の下根子桜<sup>しもねこさくら</sup>の別宅で独居自炊生活に入り、付近を開墾耕作する。同年8月には羅須地人協会<sup>らすちじんきょうかい</sup>という私塾を設立し、農民たちに科学やエスペラント、農業技術などを教えた。羅須地人協会の活動は、1927年(昭和2)3月頃、休止したが、農民たちへの献身的な生活は、1928年(昭和3)、病を得て倒れるまで続いた。1931年(昭和6)2月、一時的に回復して、東北碎石工場の技師となり石灰宣伝販売に従事する。同年9月、宣伝販売の目的で上京するが、到着後発熱して、帰郷。以降、2年間、詩や童話、文語詩などを書き、また、肥料の相談の返事を書いたりしたが、1933年(昭和8)9月21日、父親に「国訳妙法蓮華經」千部を作り、知己に配布するよう遺言して、亡くなる。享年37歳。

### ②宮沢賢治の東京

宮沢賢治は、基本的に故郷の花巻で生活したが、生涯9回上京している。その9回の上京は以下のとおりである。

	年月	上京時年齢	上京
1	1916年 (大正5) 3月	19	盛岡高等農林学校の第2学年修学旅行で、京都、奈良へ行き、解散後、有志と伊勢、箱根、東京を見物。3月20日、西ヶ原農事試験場と東京高等蚕糸学校見学。21日、農事試験場渋谷分場、駒場農科大学見学。
2	1916年 (大正5) 7月～9月	19～20	夏期休暇を利用してドイツ語講習受講のために上京。7月30日に夜行にて発ち、31日上野着。9月2日からの秩父、長瀨、三峰地方、土性・地質調査見学に参加するまで東京に滞在。

3	1917年 (大正6) 1月	20	父の商用の代理として。1月4日上京、7日帰花。
4	1918年 (大正7) 12月～翌年3月	22	妹、トシの病気看病のため。12月27日朝上野着。次の年の3月3日離京。
5	1921年 (大正10) 1月～8月	24	家人に無断で上京。1月24日朝着京。8月中旬、妹トシ病気の報を受け、帰花。この間、国柱会での奉仕活動を行い、また、童話を書く。
6	1923年 (大正12) 1月	26	1月4日上京。11日帰花。滞在中、弟、清六に出版社へ童話原稿を持参させるが、出版を断られる。
7	1926年 (昭和1) 12月	30	各種講習受講（セロ、エスペラントなど）のため。12月3日着京。29日離京。
8	1928年 (昭和3) 6月	31	伊豆大島行の前後の滞京。6月8日着京。12日大島に向かい14日帰京、24日帰花。
9	1931年 (昭和6) 6月	34	東北砕石工場の仕事のため。6月20日着京。27日離京。東京に到着後、直ちに発熱し、死を覚悟する。

『企画展示「東京」ノートの〈東京〉』（宮沢賢治記念館／発行 栗原敦／監修 1995年（平成7）8月）を基に作成。

賢治が上京したのは、大正時代から昭和初期にあたり、関東大震災前後の時期である。1923年（大正12）の関東大震災は、東京をはじめ関東地方に甚大な被害をあたえたが、復興事業により東京の町並みは近代的になり市民文化が勃興した。賢治は、このような時代の東京の文化を享受すると同時に、震災後の近代化する東京に対しては批判的な眼も向けた。

上京中は、語学・音楽・演劇など文化の摂取を積極的に行っており、賢治にとって東京は文化の中心地であり、あこがれの的であった。しかし、賢治は盛岡高等農林学校在学中より日蓮宗を信仰し、世界全体の幸福を願う気持ちを強く持ち、東北地方の農民たちを救うことを考えるようになった。それにもなって、享楽的生活を送る東京への反抗心を持つようになっていたのである。

この9回の上京の内、5回目の上京と7回目の上京は、期間も比較的長く、賢治と東京について考えるには重要な上京であった。

5回目の上京は、1921年（大正10）1月から8月までであり、この約7ヶ月の滞在は賢治が東京に滞在した期間では最長である。賢治は、18歳の時に法華経にふれ、異常な感動を覚えたというが、1920年（大正9）、24歳の時には、日蓮宗への帰依、国柱会（純正日蓮主義を信奉する在家仏教の模範教団として、1884年（明治17）、田中智学によって創立した。）に入会した。そして、1921年（大正10）1月23日、店番中、頭の上の棚から日蓮聖人の「御書」（遺文録）が落ちてきたことを契機に、突如上京した。翌朝、

国柱会館（現：台東区根岸1丁目）に行き、理事の<sup>たかち おちよう</sup>高知尾智耀と会う。賢治は、本郷区菊坂町75（現：文京区本郷4丁目35番地5号）の稲垣信次郎方の2階に間借りした。そして、東京帝国大学赤門前の文信社（現：文京区本郷6丁目2番地）でガリ版切りなどしながら国柱会館に通い、様々な奉仕活動をしたり、街頭布教に参加したりした。国柱会では高知尾智耀から法華文学の創作を進められ<sup>3)</sup>、猛然と童話の製作に没頭するようになった。しかし、8月下旬ころ、家から妹トシの発病を電報で知らされ、帰花した。弟の清二郎が、花巻駅に出迎えたとき、大きなトランクにぎっしり入った原稿に驚いたという。

7回目の上京は、1926年（昭和1）12月3日から29日までの20日間の滞在である。この年の8月頃、賢治が設立した<sup>らすちじんきょうかい</sup>羅須地人協会は、彼の著わした『農民芸術概論要綱』の理想実現の場であり、そこで農村改良と農民芸術の興隆をめざした活動が行なわれた。宮沢家別荘で農耕自炊生活をしながら、農民や学生を集め、講義や集会を開き、科学やエスペラント、農業技術などを教えた。レコードコンサート、楽器の練習会、子供向けの童話朗読会もあった。そして、この活動をより充実させるため、上京をし、様々な文化の摂取をはかった。上京後は、神田錦町3丁目19番地の薪炭屋の上州屋の2階に下宿し、午後2時ごろまで上野の帝国図書館で勉強し、その後、神田美土代町のYMCAタイピスト学校、数寄屋橋の新交響楽団練習所でオルガンの練習、つぎに丸ビル8階の旭光社でエスペラントを教わり、夜は下宿で復習、予習をした。また、築地小劇場の新劇や歌舞伎の観劇も行っている。このように、充実した勉強を東京で行い、花巻に帰っている。賢治の上京では、常に、文化の摂取に励んでいるが、この第7回目の上京は、その典型例といえる。

### ③宮沢賢治の詩

宮沢賢治が、生前出版した詩集は、心象スケッチ『春と修羅』（関根書店 1924年（大正13）4月）1冊である。ほかにも、未刊行の詩稿があるが、それらの中に東京の地名が出てくる詩は意外に少ない。「えどはくカルチャー」では、「「東京」ノート」という詩稿に書かれた、賢治の詩をいくつか紹介し、宮沢賢治が東京をいかに詩に書いたかを見た。

「「東京」ノート」とは、1928年（昭和3）の8回目の賢治の上京のことを中心に、東京を題材とした短歌、詩をまとめたノートである。具体的には、72ページの大学ノートに手書きで書かれたものである。制作は1930年（昭和5）ころと推定される。賢治は、すでに8度東京に来ており、それまでの東京経験に基づく短歌や詩をまとめるつもりで、この「「東京」ノート」を書いたものと思われる。

「「東京」ノート」に記された詩は、必ずしも時代順に並べられているわけではないが、書かれた順に並べ直すと、次のような時期に、以下の作品が書かれている。<sup>4)</sup>

1916年（大正5）第1回目、第2回目の上京時

「鉱物陳列館」、「博物館」、「浅草の木馬」、「神田」、「植物園」、「上野」

1921年（大正10）第5回目の上京時

「メフィスト（?）」、「桜」、「千住の白き空」、「一むれの墓」、「泥洲、芦原」、「聖なる窓」、「公衆食堂（須田町）」、「ダルゲ（三階・地下室）」、「はちす（蓮）」、「孔雀」

## 1928年（昭和3）第8回目の上京時

「浮世絵展覧会」、「高架線、六月の処女、街路樹、都会のひるの触手」、「グッタペルカのライオン、ネオン燈」、「日活館、田中豊明」、「自働車群」、「六代菊五郎、水に溺れた蒙古の隊長」、「丸善」、「電柱、鉄のタンク、神経質なガスの灯」、「東京ことば」

「エドはくカルチャー」では、それぞれの時期の詩から1編ずつを紹介した。最初は、東京での経験を純粹に喜んでいるが、次第に東京への眼が批判的になってゆくのがわかる。経済的に厳しい東北で生活をし、また、法華經に奉じ、東北の農民の生活を改善してゆこうとした賢治にとっては、東京の文化はあこがれの的である一方、東京での生活に対しては批判的にならざるを得なかったと考えられる。童話集『注文の多い料理店』でも、「注文の多い料理店」など、都市への批判が主題となっている作品もあり、賢治の東京への思いには、あこがれと批判、両面があったと思われる。

## 鉱物陳列館

しろきそら

この東京のひとむれに

まじりてひとり京橋に行く

### 【鑑賞】

- ・「『東京』ノート」40頁に記されている短歌。この歌の前に、「一九一六年三月一〇日（？）（大正五年）盛岡高農 修学旅行にて 始めて出京」とある。
- ・賢治が、盛岡高等農林学校の第2学年修学旅行で東京に行ったのは1916年（大正5）3月20日、21日で、19歳の時である。これは、その時の作品と推測できる。
- ・歌意「広い空の下、東京の雑沓の中に混じって、一人で京橋に行く。」
- ・当時、京橋区木挽町に農商務省地質調査所の鉱物陳列館があり、そこに行ったことを詠ったものであろう。賢治は、少年のころから石に強い関心を持ち、「石っ子賢さん」とあだ名されたほどであり、東京の鉱物陳列館は、上京して、ぜひ行って見たかった所であったと思われる。また、「ひとり京橋に行く」という言葉には、見知らぬ土地である東京をひとりで目的地に行くという、地方から始めて東京に出てきた若者の持つ緊張感と喜びや自負が読み取れる。

## 公衆食堂（須田町）

あわたゞしき薄明の流れを

泳ぎつゝいそぎ飯を食むわれら

食器の音と青きむさぼりとはいともかなしく

その一枚の皿

硬き床にふれて散るとき

人々は声をあげて警しめ合へり

【鑑賞】

- ・「東京」ノート49頁に記されている詩。この詩の前に、「一九二一年一月より八月に至るうち」と記されていることから、第5回目の上京の際に書かれたものと推察できる。
- ・一種の大衆食堂である公衆食堂で、早朝あるいは夕暮れ時、急いで食事をするわれわれの様子は、とてもかなしく惨めである。また、一枚の皿が床に落ちて割れたときなどは、周りの人々は、声を上げて警め合う。都会の庶民の悲しい様子が戯画的に描かれ、都市の一面が批判的にとらえられている。
- ・「公衆食堂」とは、東京市が設置した庶民のための公営食堂で、1918年（大正7年）に全国で発生した「米騒動」を契機としてできたものである。一般公衆に対し低廉で、栄養に富む食事を供給することを目的とし、また、社会不安を緩和することも設置目的の一つであった。公衆食堂は、1920年（大正9）、神楽坂に第1号店が開設され、2号店が上野（下谷坂本町）に、そして、次年度には、日本橋、神田橋、本所に開設されていった。
- ・この題名には、（須田町）とあるが、須田町に東京市営の公衆食堂があったという記録はない。賢治は、1921年（大正10）、6月29日、母イチアてに出した手紙の中に、「食事も十二三銭出せば、実に立派なものです。図書館の中は、どうも高くて困ります。」との記述があり、賢治が、上京中、よく通った、上野の帝国図書館そばの、上野（下谷坂本町）の公衆食堂を利用していていたと推測される。したがって、この詩は、上野の公衆食堂での経験を基に書かれたものかもしれない。
- ・なお、「須田町食堂」という当時、東京各地で支店を出していた食堂があるが、須田町食堂は、1924年（大正13）に創業しているので、この「公衆食堂（須田町）」の制作年を1921年（大正10）とすれば、この食堂は、「須田町食堂」ではありえない。須田町食堂は、一般の経営の食堂で、公設の食堂より価格も高く、この作品の示すような雰囲気食堂とは異なる。<sup>5)</sup>

丸善階上喫煙室小景

一九二八、六、一八、

ほとんど初期の春信みたいな色どりで

またわざと古びた青磁のいろの窓かけと

ごく落ちついた陰影を飾ったこの室に

わたくしはひとつの疑問をもつ

壁をめぐってソファと椅子がめぐらされ

そいつがみんな共いろで

たいへん品よくできてはゐるが



どういふわけかどの壁も  
ちやうどそれらの椅子やソファのすぐ上で  
椅子では一つソファは四つ  
団子のやうににじんである  
……高い椅子には高いところで  
低いソファは低いところで  
壁がふしぎににじんである……  
そらにはうかぶ鯖の雲  
築地の上にはひかってかゝる雲の峯……  
たちまちひとり  
青じろい眼とこけた頬との持主が  
奇蹟のやうにソファにすはる  
それから頭が機械のやうに  
うしろの壁へよりかゝる  
なるほどなるほどかう云ふわけだ  
二十世紀の日本では  
学校といふ特殊な〔機〕関がたくさんあって  
その高級な種類のなかの青年たちは  
あんまりじぶんの勉強が  
永くかかってどうやら  
若さもなくなりさうで  
とてもこらへてゐられないので  
大てい椿か鯛の油を頭につける  
そして充分女や酒や登山のことを考へたうへ  
ドイツ或は英語の本も読まねばならぬ  
それがあすこの壁に残って次の世紀へ送られる  
向ふはちやうど建築中  
ごっしんふうと湯気をふきだす蒸気槌  
のぼってざあっとコンクリートをそゝぐ函  
そこで隅にはどこかの沼か  
陰気な町の植木店から  
伐りとって来た東洋趣味の蘆もそよぐといふわけだ  
風が吹き  
電車がきしり  
煙突のさきはまはるまはる

またはいってくる  
仕立の服の見本をつけた  
まだうら若いひとりの紳士  
その人はいまごくつゝましく煙草をだして  
    電車がきしり  
    自働車が鳴り  
    自働車が鳴り  
ごくつゝましくマッチをすれば  
    コンクリートの函はのぼって  
    青ぞら青ぞら　ひかる鯖ぐも  
ほう　何たる驚異  
マッチがみんな爆発をして  
ひとはあわてゝ白金製の指環をはめて手をこする  
    ……その白金が  
    大ばくはつの原因ですよ……  
    ビルデングの黄の練瓦  
    波のやうにひかり  
    ひるの銀杏も  
    ぼろぼろになった電線もゆれ  
    ユッカのいろの<sup>ドーム</sup>隆穹の上で  
    避雷針のさきも鋭くひかる

#### 【鑑賞】

- ・「東京」ノート」の58頁～62頁に記載されている作品。題名の横に「一九二八、六、一八、」と記されていることから、8回目の上京の経験が基になっていると考えられる。
- ・東京日本橋の「丸善階上喫煙室」を舞台とする作品。ソファと椅子に沿った壁に団子のようなニジミがあるが、それは、勉学に疲れた若い青年たちが油を付けた頭を壁に押しつけるからできたものである。また、関東大震災後の東京の復興工事の様子も描かれる。そして、最後に、若い紳士がマッチを擦れば、指にはめた白金（プラチナ）が大爆発を起こす。この作品では、丸善の喫茶室内の情景を戯画的に描出し、都会の学生や知識人、また、震災復興中の東京を批判的に描く。
- ・丸善は、1869年（明治2）に福沢諭吉の門人、<sup>はやしうでき</sup>早矢仕有的によって創業された書店・出版社・専門商社。洋書輸入などを通じ、西洋の文化・学術紹介に貢献し、多くの作家や文化人がその恩恵を被った。宮沢賢治も例外ではなく、理系の専門書・洋書の注文先として丸善は欠かせない書店であった。1921年（大正10）の第5回目の上京の際には、家出としての上京であったことから、経済的に困窮し、丸善に注文していた書籍を解約して予約金約29円を手にしていた。また、丸善製の原稿用紙は多くの作

家に利用されたが、宮沢賢治の童話「銀河鉄道の夜」も丸善製の原稿用紙が用いられている。

- ・丸善の日本橋店の店舗は、1870年（明治3）にでき、1910年（明治43）佐野利器<sup>さの としかた</sup>の設計で赤煉瓦作りの本社社屋が竣工した。しかし、関東大震災により焼失し、震災後、「ブラック建築」により再建された。この詩に描かれている丸善は、現実と照らし合わせてみると、この再建後の丸善の2階の喫茶室ということになる。
- ・関東大震災後、実業家の渋沢栄一や内村鑑三、北原白秋など、多くの人々は、天譴論<sup>てんけん</sup>を説いた。関東大震災は、腐敗した人間社会を懲らしめるためにもたられた懲罰だとする見方である。天譴論は、大きな災害が起きるたびに起こってくる考え方で、関東大震災後だけに起こった特別なものではないが、明治以降、日清、日露戦争と対外的な戦争に勝ち続け、急速に発展する日本、そして、その首都である東京に対して疑問が持たれ、それが天譴論となって出てきても不思議ではなかった。この作品に見られるように、関東大震災後の東京を戯画的に見る見方には、天譴論と通底するものがある。

## おわりに

明治時代に岩手県で生まれた石川啄木も宮沢賢治も共に、東京に深い関わりを持った文学者であった。

啄木の作品には、明治後期の東京の政治、経済の厳しい面が描かれている。啄木自身、東京で、経済的に、また、家庭的に厳しい生活を営み、その実感を短歌で表現した。また、当時の東京は、資本主義の発展により社会主義の運動が活発化し、国家は大逆事件などにより取り締まりを強めてゆくが、啄木は詩や評論を書くことにより、そのような状況についての考えを深めていった。啄木は、東京の社会の中に入り込み、明治後期の東京と深く関わった文学者であった。

一方、賢治は、故郷の花巻で生活をしながら、東京の最先端の文化に接するため、しばしば上京した。それは、自己の文学活動のためだけでなく、宗教活動や農村の改善運動のためでもあった。東京は、賢治にとっては高い文化を受容できる都市であったが、童話や詩を読むと、必ずしも東京を評価していないことがわかる。東京は、経済や文化では他の地域には劣らないが、人間性を衰えさせる場所であると賢治は考えていたようである。賢治は、大正時代から昭和初期の東京と深く関わりつつ、一定の距離をもって東京を批判的に眺めていたといえる。

啄木と賢治は、このように対照的であるが、それぞれの時代の東京と関わっていった。東京は地域の文学者たちを魅了し、ひきつける都市であったことがわかる。

## 3. 萩原朔太郎

### はじめに

第3回目の講座では、萩原朔太郎をとりあげた。日本近代詩は、明治以降、多くの詩人たちによって、言語面・内容面で近代化していったが、萩原朔太郎において成熟を迎えたと言われている。言語面では、柔軟な音楽性を特徴とする口語自由詩を完成させ、内容面では、幻想的・象徴的なイメージによって、人間存在の不安定さや怖れ、倦怠などという近代的な主題を表現した。朔太郎の生まれたのは現在の群

馬県前橋市であるが、1925年（大正14）、38歳の時、妻子を伴い上京し、一時帰郷することはあるが、生涯、東京市内で生活をした。日本近代詩の完成者であった朔太郎が、大正時代から昭和時代初期にかけての東京をどのように感じ、それをどのような作品にしたかを見ていった。

## （1）萩原朔太郎

### ①萩原朔太郎

萩原朔太郎（1886年（明治19）～1942年（昭和17）は、群馬県東群馬郡北曲輪町（現：前橋市千代田町）<sup>きたくるわちよう</sup>に、開業医の父、密蔵と母、ケイの長子として生まれ、経済的に余裕のある家庭で育つ。

群馬県前橋中学校の時代より短歌の創作を始め、前橋中学校卒業後は、第五高等学校（熊本）、第六高等学校（岡山）、慶應義塾大学予科などに籍を置くが、学校での学業にはなじめなかった。学校での学業をやめた後は前橋で暮らし、前橋と東京をしばしば往復するようになる。1913年（大正2）、26歳の頃から、本格的に詩作を始め、1915年（大正4）には、室生犀星、山村暮鳥と詩誌「卓上噴水」を創刊。また、翌年には室生犀星と詩誌「感情」を創刊する。1917年（大正6）2月、第1詩集『月に吠える』（感情詩社・白日社）を刊行し、詩壇に確固たる位置を占める。1923年（大正12）1月には、第2詩集『青猫』（新潮社）、同年7月には、第3詩集『蝶を夢む』（新潮社）を刊行し、朔太郎の詩壇での位置は不動のものとなる。1925年（大正14）2月、38歳の時に、東京定住のため妻子を伴って上京し、大井町の借家に住む。その後、一時、離婚によって郷里に戻ることはあるが、東京の田端、馬込、乃木坂、市ヶ谷、世田谷などに住み、室生犀星や芥川龍之介など多くの文人たちと交友関係を持った。その間、『純情小曲集』（新潮社 1925年（大正14）8月）、『氷島』（第一書房 1934年（昭和9）6月）、『宿命』（創元社 1939年（昭和14）9月）などの詩集を刊行する。1942年（昭和17）、肺炎のため逝去。享年55歳。

### ②萩原朔太郎の東京

萩原朔太郎が東京に住んだ大正時代から昭和初期、東京は関東大震災後の復興事業により近代的な都市に変貌していった。浅草に加え銀座も盛り場として栄え、東京の市街地も拡大していった。朔太郎の住んだ地域は、震災後に拡張されていった住宅地が多い。しかし、経済的には昭和恐慌の時期であり、政治的には軍部が台頭した時代で、1931年（昭和6）には、満州事変が起こり、以降15年にわたる戦争の時代が始まった。朔太郎の死の前年1941年（昭和16）には太平洋戦争が始まっている。朔太郎のいた時代の東京は、享楽と不安の緩なす時代であった。

朔太郎が東京で居住した場所は、以下の通りである。

#### ◎1925年（大正14）38歳～39歳

2月：妻子を伴い上京し、借家住まいをする。（東京府下荏原郡大井町6170番地（現：品川区西大井5丁目））

4月：転居する。（東京市外田端町311番地（現：北区田端2丁目4番7号））

11月：妻の健康が優れぬため転居する。（神奈川県鎌倉町材木座芝原481番地（現：神奈川県鎌倉市材

木座5丁目11番))

◎1926年（大正15・昭和1）38歳～39歳

11月：転居する。（東京府下荏原群馬込村平張1320番地（現：大田区南馬込3丁目23番））

◎1929年（昭和4）42歳～43歳

6月：妻との関係が紛糾し、単身帰郷。

11月：単身上京する。（赤坂区檜町6番地のアパート「乃木坂倶楽部」2階28号室（現：港区赤坂8丁目））

12月：父親重体となり、帰郷。

◎1930年（昭和5）43歳～44歳

10月：妹アイを伴い上京する。（牛込区市ヶ谷台町13番地（現：新宿区市ヶ谷台町13番地））

◎1931年（昭和6）44歳～45歳

7月：東京府下世田谷町東北沢に移る。

9月：東北沢より移住。母、妹、二児と同居する。世田谷区下北沢新屋敷1008番地。（現：世田谷区北沢2丁目37番）

◎1932年（昭和7）45歳～46歳

11月：自ら設計する家の新築にかかる。（世田谷区代田1丁目635番地の2（現：世田谷区代田1丁目35番地2））翌年1月新築落成し、母、妹アイ、二児と入居する。

このように、朔太郎は、東京市内を転々とするが、「文士村」と呼ばれる地域にも居住している。当時、東京には、「文士村」と呼ばれるような、文学者や芸術家たちがお互い交流を持ちながら住む地域が存在した。たとえば、田端文士村や馬込文士村である。朔太郎は短期間ではあるが、田端文士村と馬込文士村に住み、近隣の文学者たちと交流している。

朔太郎が、田端文士村に住んだのは、1925年（大正14）4月から11月までの8ヶ月である。田端文士村は、明治時代末期から昭和初期頃までの間、東京府北豊島郡滝野川町字田端（現在の東京都北区田端）近辺に多くの文士や芸術家たちが集まってできた文士村で、中心的な存在は芥川龍之介であった。芥川龍之介のほかには、室生犀星、菊池寛、堀辰雄、佐多稲子らも住んでいた。朔太郎は、田端に移る前には大井町に住んでおり、大井町も気に入っていたが、詩友の室生犀星がすでに田端に住んでおり、室生犀星との交際上、便利であることもあり、田端に移り住んだのである。詩誌「日本詩人」（1925年（大正14）6月号）に載った朔太郎の「郷土望景詩」を読んで感激した芥川龍之介が、寝間着姿のまま朔太郎の書斎を訪ねるようなこともあった。

田端は、江戸時代までは江戸近郊の農村で、明治時代に入っても田畑と雑木林の農村地帯であった。しかし、1887年（明治20）、上野に東京美術学校（現在の東京芸術大学）が開校し、そこへ通う学生が近隣の田端に住むようになる。さらに、1896年（明治29）には東北本線の駅として田端駅が開業し、1903年（明治36）には豊島線（現在の山手線の一部）が開通すると、駅周辺に人口が集まるようになり、次第に住宅地になっていった。1900年（明治33）には、小杉放庵（画家）が田端に移ってき、後に板谷

波山（陶芸家）、吉田三郎（彫塑家）、香取秀真（鑄金家）、山本鼎（画家・版画家）らが次々と田端に移り住み、芸術家村となっていた。そして、1914年（大正3）に芥川龍之介が、後に室生犀星が転居してき、やがて、萩原朔太郎、菊池寛、堀辰雄、佐多稲子ら文学者も田端に集まり、大正末から昭和にかけての田端は文士村としての一面を持つようになったのである。

また、朔太郎は、馬込文士村にも住んだ。朔太郎が馬込文士村に住んだのは、1926年（大正15）11月から1929年（昭和4）6月までの2年8ヶ月である。馬込文士村は、大正時代後期から昭和時代初期にかけて東京府荏原郡馬込村（現在の東京都大田区山王、馬込、中央一帯）を中心に多くの文士、芸術家たちが集まってできた文士村である。尾崎士郎、宇野千代をはじめ、川端康成、榊山潤、広津和郎、佐多稲子、吉屋信子、室生犀星、三好達治ら多くの文士が住んだ。

馬込文士村の中心的人物は、関東大震災直前に宇野千代と共に馬込に引っ越してきた尾崎士郎である。尾崎は、馬込が気に入って、文士仲間に馬込に引っ越してくるよう勧誘したという。関東大震災後、住宅地となった馬込には多くの文人たちが移住してきて、朔太郎は、1926年（大正15）11月、41歳のとき、馬込文士村に転居し、尾崎士郎や三好達治、室生犀星らと交友を持った。朔太郎は、尾崎士郎、宇野千代のモダンな生活スタイルにあこがれ、妻にもダンスを習わせるが、妻の素行に問題が出てくるようになり、それがもとで妻と離婚し、朔太郎は、二児を伴い故郷の前橋に戻るようになった。

馬込は、大正時代まで田畑の広がる田園地帯であったが、1876年（明治9年）に東海道線（京浜東北線）の大森駅が開業し、明治時代後期には、芸術家や詩人たちが山王一帯に住むようになる。日夏耿之介、小林古径、川端龍子、伊東深水、長谷川潔などである。そして、1921年（大正10）には、田園都市株式会社が、馬込などで住宅地開発計画を開始し、翌年から分譲をはじめ、尾崎士郎、宇野千代がこの土地に住み始める。関東大震災が、東京郊外の馬込の宅地化に拍車をかけるかたちとなり、多くの文士たちが移り住むようになる。馬込文士村の賑わいは、尾崎士郎が馬込を一時的に去る1930年（昭和5）頃まで続いたといわれる。

朔太郎は、上京してきて以来、借家住まいだったが、最晩年は、世田谷に自分の家を持つ。妻との離婚後、一時帰郷し、その後、また東京に出てくるのだが、1933年（昭和8）46歳の時、自ら設計した家を新築し、母・妹アイ・二児とそこに移る。場所は、世田谷区代田1丁目635番地の2（現：世田谷区代田1丁目35番地2）である。1942年（昭和17）の死まで、約10年間をそこで過す。新居は、木造2階建、小田急線旧中原駅から徒歩7、8分の距離で、家の前の崖下に川が流れ、朔太郎はこの川辺をしばしば散歩した。当時近所に住んでいた、詩人の永瀬清子は、次のようにこの家のことを書いている。「はじめにお訪ねした時、その屋根が普通の家より鋭角で黒っぽく、私は直感的にあれこそ萩原さんの家にちがいないと思って門へ廻ってみたら、案の定萩原さんのお宅だった。門も普通の寸法よりは扉の巾がせまく、はやり屋根の勾配がきつく、鋭い感じに作ってあった。塗料は濃い梅茶色であった。応接間も少しつめたい萩原さんらしい好みだった。又暗い感じのお玄関には大ぶりの庭下駄がいつも置いてあったが、そのべんがら塗りの朱い色が建物にコントラストして印象的であった。」<sup>1)</sup>

## （2）萩原朔太郎の詩

えどはくカルチャーでは、朔太郎の詩集、『月に吠える』（感情詩社・白日社 1917年（大正6）2月）、『青猫』（新潮社 1923年（大正12）1月）、『蝶を夢む』（新潮社 1923年（大正12）7月）、『純情小曲集』（新潮社 1925年（大正14）8月）、『萩原朔太郎詩集』（第一書房 1928年（昭和3）3月）、『氷島』（第一書房 1934年（昭和9）6月）、『定本青猫』（版畫莊 1936年（昭和11）3月）、『宿命』（創元社 1939年（昭和14）9月）から東京を描いた詩10編を紹介した。

### かなしい遠景

かなしい薄暮になれば、  
労働者にて東京市中が満員なり、  
それらの憔悴した帽子のかけが、  
市街中いちめんひろがり、  
あつちの市區でも、こつちの市區でも、  
堅い地面を掘つくりかへす、  
掘り出して見るならば、  
煤ぐろい嗅煙草の銀紙だ。  
重さ五匁ほどもある、  
にはひ莖のひからびきつた根つ株だ。  
それも本所深川あたりの遠方からはじめ、  
おひおひ市中いつたいにおよぼしてくる。  
なやましい薄暮のかげで、  
しなびきつた心臓がしやべるを光らしてゐる。

### 【鑑賞】

- ・「詩歌」第5巻第1号（1915年（大正4）1月）に「東京遊行詩篇－十月下旬滞京中作品－」の総題のもとに発表され、『月に吠える』（感情詩社・白日社 1917年（大正6）2月）に所収された作品。初出の題名は「遠景」。『蝶を夢む』（新潮社 1923年（大正12）7月）に「かなしい薄暮」と改題して再録された。朔太郎は、1914年（大正3）10月に上京し、約10日間滞在している。このときの滞在の経験を基に作成されたと考えられる。
- ・多くの疲れ切った労働者が、夕暮れどき、東京の町中に広がってゆき、道路工事をするという幻想的な風景を描いた作品。
- ・明治時代になり、明治政府は、東京を近代国家の都市にするため、大規模な都市改造を行った。市区改正事業という、今でいう都市計画事業を1889年（明治22）から開始し、1920年（大正9）まで続けた。主に路面電車を開通させるための道路拡張や上水道の整備がなされたが、1915年（大正4）に発

表されたこの詩の背景には、このような市区改正事業が背景にあるとも考えられる。

- ・本所深川は隅田川左岸に位置し、近代になって水運の良さから様々な業種の工場ができ工業地帯となっていた。そのため本所深川には労働者や職人が多く住むようになったが、彼らは経済的には困窮していた。この作品には、そのような本所深川の労働者が描かれている。短い滞在期間に、このような労働者に注目し、そこから東京という大都市を見るという朔太郎の視点は独特であるが、朔太郎は、常に東京の下層の人々や社会に強い関心を抱いている。

## 田舎を恐る

わたしは田舎をおそれる、  
田舎の人気のない水田の中にふるへて、  
ほそながくのびる苗の列をおそれる。  
くらい家屋の中に住まづしい人間のむれをおそれる。  
田舎のあぜみちに坐つてゐると、  
おほなみのやうな土壌の重みが、わたしの心をくらくする、  
土壌のくさつたにほひが私の皮膚をくろずませる、  
冬枯れのさびしい自然が私の生活をくるしくする。

田舎の空気は陰鬱で重くらしい、  
田舎の手觸りはざらざらして氣もちがわるい、  
わたしはときどき田舎を思ふと、  
きめのあらい動物の皮膚のにほひに悩まされる。  
わたしは田舎をおそれる、  
田舎は熱病の青じろい夢である。

## 【鑑賞】

- ・初出「感情」第2年第1月号（1917年（大正6）1月）。『月に吠える』（感情詩社・白日社 1917年（大正6）2月）所収。
- ・田舎の自然とそこに住む人間を陰鬱なものとしてとらえ、それらを恐れるという作品。
- ・朔太郎の東京への憧れには強いものがあり、その背景にはこのような郷里前橋への否定的な思いがあった。
- ・朔太郎は、「或る詩人の生活記録」（『近代風景』第2巻第6号 1927年（昭和2）6月）で、生地の前橋を次のように述べている。「上州の小都会、M市という所で私は生れ、長い年月の間、孤独にさびしく暮してきた。何者も、私の求めるものはそこに無かった。退屈な、刺戟のない、単調な田舎の生活が、日々に私を苛々させ、あてのない空虚な鬱憤を感じさせた。私と町の人々とは、理由のない感



情から、互に漠然たる敵意を感じ合っていた。」

- ・ 朔太郎は、39歳まで親の援助により労働の営みをせず、ほぼ生家の前橋で暮らした。当時の前橋は、製糸産業と農業が密着した町であったが、朔太郎は、そのような前橋を生活に刺激や変動の乏しい地方都市と感じたのであろう。そういう土地の上流家庭に育ち、芸術家として日々を過している朔太郎が、町の人々に風変わりだという印象を与えたのは避けがたく、朔太郎は、そのような囲りの雰囲気強く感じ、そこに疎外感や余計者の意識や負い目を負ったのである。

## 青猫

この美しい都會を愛するのはよいことだ  
この美しい都會の建築を愛するのはよいことだ  
すべてのやさしい女性をもとめるために  
すべての高貴な生活をもとめるために  
この都にきて賑やかな街路を通るのはよいことだ  
街路にそうて立つ櫻の並木  
そこにも無数の雀がさへづつてゐるではないか。

ああ このおほきな都會の夜にねむれるものは  
ただ一疋の青い猫のかげだ  
かなしい人類の歴史を語る猫のかげだ  
われの求めてやまざる幸福の青い影だ。  
いかならん影をもとめて  
みぞれふる日にもわれは東京を戀しと思ひしに  
その裏町の壁にさむくもたれてゐる  
このひとのごとき乞食はなにの夢を夢みて居るのか。

## 【鑑賞】

- ・ 初出「詩歌」第7巻第4号（1917年（大正6）4月）。『青猫』（新潮社 1923年（大正12）1月）所収。『定本青猫』（版畫莊 1936年（昭和11）3月）に再録。
- ・ 1連では、口語体により様々な都会の良さ、美しさを賛美する。2連の前半で「青い猫」が登場し、後半になると文語体になり、都会の夜に眠る「乞食」が登場し、都会における生活の苦しみを詠う。しかし、都会を否定しているものではなく、都会の複雑さや、さらにその先にある、朔太郎を魅了する都会の魅力を伝えようとしているように読める。
- ・ 朔太郎は、『定本青猫』（版畫莊 1936年（昭和11）3月）の自序で、「青猫」は、「都会の空に映る電線の青白いスパークを、大きな青猫のイメージに見ているので、当時田舎にいて詩を書いていた私が、

都会への切ない郷愁を表象している。」と説明している。「電線の青白いスパーク」とは、具体的には、電車のパンタグラフが放電する際出る光であるが、この作品が書かれた1917年（大正6）4月ころには、たとえば、山手線（当時はまだ環状線にはなっていない）はすでに電化されており、朔太郎は、夜間電車のパンタグラフの放電のスパークなどを見て、そこに都会の先端の美を認め、それを「青猫」に象徴させたのかもしれない。また、この作品が書かれたころ、朔太郎は、まだ前橋で生活をしており、しばしば上京する際に、このような「電線の青白いスパーク」を見、東京への「切ない郷愁」を強く感じたのである。

## 群衆の中を求めて歩く

私はいつも都會をもとめる  
都會のにぎやかな群集の中に居ることをもとめる  
群集はおほきな感情をもつた浪のやうなものだ  
どこへでも流れてゆくひとつのさかんな意志と愛欲とのぐるうぶだ  
ああ ものがなしき春のたそがれどき  
都會の入り混みたる建築と建築との日影をもとめ  
おほきな群集の中にもまれてゆくのはどんなに楽しいことか  
みよこの群集のながれてゆくありさまを  
ひとつの浪はひとつの浪の上にかさなり  
浪はかずかぎりなき日影をつくり 日影はゆるぎつつひろがりすすむ  
人のひとりひとりにもつ憂ひと悲しみと みなその日影に消えてあとかたもない  
ああ なんといふやすらかな心で 私はこの道をも歩いて行くことか  
ああ このおほいなる愛と無心のたのしき日影  
たのしき浪のあなたにつれられて行く心もちは涙ぐましくなるやうだ。  
うらがなしい春の日のたそがれどき  
このひとびとの群は 建築と建築との軒をおよいで  
どこへどうしてながれ行かうとするのか  
私のかなしい憂鬱をつつんでゐる ひとつのおほきな地上の日影  
ただよふ無心の浪のながれ  
ああ どこまでも どこまでも この群集の浪の中をもまれて行きたい  
浪の行方は地平にけむる  
ひとつの ただひとつの「方角」ばかりさしてながれ行かうよ。

## 【鑑賞】

・初出「感情」第2巻第6号（1917年（大正6）6月）。『青猫』（新潮社 1923年（大正12）1月）所収。

『定本青猫』（版畫莊 1936年（昭和11）3月）に再録。

- ・春の夕暮れ時、かなしく憂鬱な「私」が、都会の賑やかな群衆の中に入り込み、心地よい時間を過すという詩。群衆一人一人は、それぞれ憂いや悲しみを持っているが、都会の雑踏の中を歩み、群衆の一員となると、それらを忘れて無心になることができる。近代の都会ならではの状況をとらえ、その中で感じる快感を詠う。
- ・この作品が書かれた時、朔太郎はまだ前橋に住んでいたが、時折、上京し、浅草で遊んだ。この作品の「群衆」は、盛り場などにおける多人数の群衆を思わせる。大正前期の浅草には多くの映画館が建ち並び、多くの人々で賑わい、浅草は東京一の盛り場であった。

## 群衆の中に居て

群衆は孤獨者の家郷である。ボードレール

都會生活の自由さは、人と人との間に、何の煩瑣な交渉もなく、その上にまた人人が、都會を背景にするところの、楽しい群衆を形づくって居ることである。

晝頃になつて、私は町のレストランに坐つて居た。店は賑やかに混雑して、どの卓にも客が溢れて居た。若い夫婦づれや、學生の一組や、子供をつれた母親やが、あちこちの卓に坐つて、彼等自身の家庭のことや、生活のことやを話して居た。それらの話は、他の人人と関係がなく、大勢の中に混つて、彼等だけの仕切られた會話であつた。そして他の人人は、同じ卓に向き合つて坐りながら、隣人の會話とは関係なく、夫々また自分等だけの世界に屬する、勝手な仕切られた話をしゃべつて居た。

この都會の風景は、いつも無限に私の心を樂ませる。そこでは人人が、他人の領域と交渉なく、しかもまた各人が全體としての雰圍氣（群衆の雰圍氣）を構成して居る。何といふ無關心な、伸伸とした、楽しい忘却をもつた雰圍氣だらう。

<sup>たそがれ</sup>黄昏になつて、私は公園の椅子に坐つて居た。幾組もの若い男女が、互に腕を組み合わせながら、私の坐つてゐる前を通つて行つた。どの組の戀人たちも、嬉しく樂しさうに話をして居た。そして互にまた、他の組の戀人たちを眺め合ひ、批判し合ひ、その美しい伴奏から、自分等の空にひろがるところの、戀の楽しい音樂を二重にした。

一組の戀人が、ふと通りかかつて、私の椅子の側に腰をおろした。二人は熱心に、笑ひながら、羞かみながら嬉しさうに囁いて居た。それから立ち上り、手をつないで行つてしまつた。始めから彼等は、私の方を見向きもせず、私の存在さへも、全く認識しないやうであつた。

都會生活とは、一つの共同椅子の上で、全く別別の人間が別別のことを考へながら、互に何の交渉もなく、一つの同じ空を見てゐる生活——群衆としての生活——なのである。その同じ都會の空は、あの宿なしのルンペンや、無職者や、何處へ行くとはいふあてもない人間やが、てんでに自分のことを考へながら、ぼんやり竝んで坐つてゐる、浅草公園のベンチの上にもひろがつて居て、灯ともし頃の都會の情趣を、無限に侘しげに見せるのである。

げに都會の生活の自由さは、群衆の中に居る自由さである。群衆は一人一人の單位であつて、しかも

全體としての綜合した意志をもつてゐる。だれも私の生活に交渉せず、私の自由を束縛しない。しかも全體の動く意志の中で、私がまた物を考へ、爲し、味ひ、人人と共に楽しんで居る。心のいたく疲れた人、重い悩みに苦しむ人、わけても孤獨を寂しむ人、孤獨を愛する人によつて、群集こそは心の家郷、愛と慰安の住家である。ボードレールと共に、私もまた一つのさびしい歌を唄はう。——都會は私の戀人。群集は私の家郷。ああ何處までも、何處までも、都會の空を徘徊しながら、群集と共に歩いて行かう。浪の彼方は地平に消える、群集の中を流れて行かう。

#### 【鑑賞】

- ・ 初出「四季」第4号（1935年（昭和10）2月）。『宿命』（創元社 1939年（昭和14）9月）所収。
- ・ この詩は、「群衆の中を求めて歩く」と共通するテーマを、散文詩という形態に改めて書いたもの。「群衆の中を求めて歩く」では、なぜ、「私」が、「群衆」を求めるのかという理由が直接的には述べられなかったが、ここではその理由が述べられる。都會では、「人と人との間に、何の煩瑣な交渉もなく」、「だれも私の生活に交渉せず、私の自由を束縛しない」。「私」にとってはこのように、自分の孤独が保証される状態は快い。このような状態は、故郷の前橋ではなく、故郷と強く対比された東京がここにはある。
- ・ なお、「群衆の中を求めて歩く」を書いた時、朔太郎は東京に住んでいなかったが、この散文詩「群衆の中に居て」を書いた時は、すでに東京で自宅を持っていた時期であり、レストランや公園の様子など、東京の情景をより具体的に記述することができたのであろう。
- ・ 冒頭に、ボードレール（Charles-Pierre Baudelaire 1821～1867）というフランスの象徴詩人の詩句が、引用されているが、ボードレールは、散文詩集『パリの憂鬱』（"Le Spleen de Paris" 1869）の中の「群衆」（Les Foules）で次のように言っている。「群衆に沐浴するというのは、誰にでもできる業ではない。群衆を楽しむことは一つの術である。（中略）群衆、孤独。活動的で多産な詩人にとって、たがいに等しく、置き換えることの可能な語。己の孤独を賑わせる術を知らぬ者は、忙しい群衆の中であって独りである術をも知らない。」<sup>2)</sup> ボードレールが描いたのは、19世紀のパリであり、1930年代の東京とは全く異なるが、朔太郎はボードレールの作品から刺激を受け、自分の文脈の中で東京の群衆を描いたのである。

#### 公園の椅子

人氣なき公園の椅子にもたれて  
われの思ふことはけふもまた烈しきなり。  
いかなれば故郷のひとのわれに辛く  
かなしきすももの核を噛まむとするぞ。  
遠き越後の山に雪の光りて  
麥もまたひとの怒りにふるへをのくか。

われを嘲けりわらふ聲は野山にみち  
苦しみの叫びは心臓を破裂せり。  
かくばかり  
つれなきものへの執着をされ。  
ああ生れたる故郷の土<sup>つち</sup>を踏み去れよ。  
われは指にするどく研<sup>と</sup>げるナイフをもち  
葉櫻のころ  
さびしき椅子に「復讐」の文字を刻みたり。

#### 【鑑賞】

- ・「上州新報」（1924年（大正13）1月1日）に「郷土望郷詩篇－公園の椅子－」として発表され、「日本詩人」第5巻第6号（1925年（大正14）6月）に「郷土望郷詩」の総題で再発表された。再発表されたとき、朔太郎は田端に住んでおり、近くに住む芥川龍之介は、それを読んで感激し、ねまき姿のまま飛び込んできたというエピソードがある。この作品は、『純情小曲集』（新潮社 1925年（大正14）8月12日）に収録された。「郷土望郷詩」は、この「公園の椅子」など10編の詩からなり、郷土を哀傷的に描く風物詩と、郷土への複雑な憎悪を詠った作品からなる。
- ・故郷、前橋の公園の椅子に、郷土への怨念の文字、「復讐」をナイフで刻みつけるという、激情を文語体で表現した詩。
- ・「日本詩人」に再発表されたとき、朔太郎は、序言に次のように記している。「最近長く住みなれた故郷を捨てて、家族と共に東京へ移住することになった。ここに掲げる数編の詩は、郷土に於ける私の生活－それは悔恨と孤独に沁み入り、屈辱に歯がみし、そして灼くような憤怒に燃えながら、しづかに自分を堪えていた。－の記録であり、悲しみの烈くして純情の爆発せる詩篇である。」
- ・また、『純情小曲集』には「郷土望郷詩の後に」という自作解説が付いており、そこに次のように記されている。「前橋公園は、早く室生犀星の詩によりて世に知らる。利根川の河原に望みて、堤防に櫻を多く植ゑたり、常には散策する人もなく、さびしき芝生の日だまりに、紙屑など散らばり居るのみ。所所に悲しげなるベンチを据ゑたり。我れ故郷にある時、ふところ手して此所に來り、いつも人氣なき椅子にもたれて、鴉の如く坐り居るを常とせり。」室生犀星は萩原朔太郎を訪ねて前橋を訪れ、「前橋公園」という詩を書いている。
- ・朔太郎の東京への憧憬の背後には、このような故郷での悔恨、孤独、屈辱、憤怒の念があるのである。

#### 大井町

おれは泥靴を曳きずりながら  
ネギや ハキダメのごたごたする  
運命の露路をよろけあゝいた。

ああ 奥さん！ 長屋の上品な<sup>かかあ</sup>鼻ども  
そこのきたない煉瓦の窓から  
乞食のうす黒いしやつぽの上に  
鼠の尻尾でも投げつけてやれ。  
それから構内の石炭がらを運んできて  
部屋中いつばい やけに煤煙でくすぼらせろ。  
そろそろ夕景が<sup>せま</sup>薄つてきて  
あつちこつちの家根の上に  
亭主のしやべるが光り出した。  
へんに紙屑がぺらぺらして  
かなしい日光のさしてるところへ  
餓鬼共のヒネびた聲がするではないか。  
おれは空腹になりきつちやつて  
そいつがバカに悲しくきこえ  
大井町織物工場の暗い軒から  
わあッと言つて飛び出しちやつた。

#### 【鑑賞】

- ・ 初出「婦人之友」第19巻第9号（1925年（大正14）9月）。『萩原朔太郎詩集』（第一書房 1928年（昭和3）3月25日）所収。
- ・ 大井町の長屋に住む貧しい人々の、粗野であるが生命力あふれる様子を描いた詩。
- ・ 1925年（大正14）2月、朔太郎は、妻と2人の子を伴い上京し、東京での最初の住居を大井町に構えた。その借家は日当たりが悪く、雪解けの道はどろどろのぬかるみで、ゴム長靴を履かないと歩けなかったという。しかし、朔太郎は、大井町を大変気に入っていた。随筆「移住日記 大井－田端－鎌倉－馬込」（『都新聞』1927年（昭和2）6月14日～17日）に次のように記している。「大井町！ いかにしても私はその記憶を忘れない。丁度私が此所に来た時、私は自分の前から幻想した、詩の中の景色を現実に見る気がした。私の詩集「青猫」で歌はうとした<sup>のすたるぢやが</sup>、丁度その工場町で、幻燈のやうに映されて居るではなか。私は<sup>すっかり</sup>大井町が好きになった。恐らく永久に、私は此所に住まうとさへ決心した。」また、散文詩「大井町」（『詩と随筆集』創刊号 1928年（昭和3）5月号）も書いており、大井町への愛着を詠っている。ただ、大井町に住んだのは、約2ヵ月間であった。
- ・ 当時の大井町は、工場地帯で、近隣に織物工場や鉄道工場の住宅地域があり、近辺には長屋が建ち並んでいたような地域であった。

#### 郵便局

郵便局といふものは、港や停車場と同じく、人生の遠い旅情を思はすところの、悲しいのすたるぢやの存在である。局員はあわただしげにスタンプを捺し、人人は窓口に群がってゐる。わけても貧しい女工の群が、日給の貯金通帳を手にながら、窓口に列をつくつて押し合つてゐる。或る人人は爲替を組み入れ、或る人人は遠國への、かなしい電報を打たうとしてゐる。

いつも急がしく、あわただしく、群衆によつてもまれてゐる、不思議な物悲しい郵便局よ。私はそこに來て手紙を書き、そこに來て人生の郷愁を見るのが好きだ。田舎の粗野な老婦が居て、側の人にたのみ、手紙の代筆を懇願してゐる。彼女の貧しい村の郷里で、孤獨に暮らしてゐる娘の許へ、秋の裕や襦袢やを、小包で送つたといふ通知である。

郵便局！ 私はその郷愁を見るのが好きだ。生活のさまざまな悲哀を抱きながら、その薄暗い壁の隅で、故郷への手紙を書いてる若い女よ！ 鉛筆の心も折れ、文字も涙によごれて亂れてゐる。何をこの人生から、若い娘たちが苦しむだらう。我我もまた君等と同じく、絶望のすり切れた靴をはいて、生活の港港を漂泊してゐる。永遠に、永遠に、我我の家なき魂は凍えてゐるのだ。

郵便局といふものは、港や停車場と同じやうに、人生の遠い旅情を思はすところの、魂の永遠ののすたるぢやだ。

#### 【鑑賞】

- ・初出「若草」第5巻第3号（1929年（昭和4）3月）。『宿命』（創元社 1939年（昭和14）9月）所収。
- ・故郷を離れ、都会で貧しい生活をしている女性たちが、都会の郊外や場末にある小さな郵便局を通して、故郷とさまざまな通信をする姿を描く。大正末から昭和初期の郵便局における、東京の人々の生活の一端がクローズアップされて描かれている。故郷との通信を様々な形で行う郵便局には、郷愁の念が満ち、また、港や停車場と同じような旅情があると見ている。
- ・朔太郎は、東京に出てきても、生家から振替貯金で生活費の送金を受けており、大井町を振り出しに転々と居を移していたとき、それぞれの町の郵便局に出かけていた。朔太郎だけでなく、地方から東京に出てきた多くの人々が、郵便局で故郷との通信をしていた。
- ・この作品のほか、朔太郎は、「郵便局の窓口で」（初出「婦人之友」第21巻第6号（1927年（昭和2））『定本青猫』所収。）という作品を書いている。そこでは、零落した「僕」が、父親に郵便局の窓口で手紙を書くという内容になっている。

#### 乃木坂倶楽部

十二月また來れり。

なんぞこの冬の寒きや。

去年はアパートの五階に住み

荒漠たる洋室の中

壁に寢臺を寄せてさびしく眠れり。

わが思惟するものは何ぞや  
すでに人生の虚妄に疲れて  
今も尙家畜の如くに飢ゑたるかな。  
我れは何物をも喪失せず  
また一切を失ひ盡せり。  
いかなれば追はるる如く  
歳暮の忙がしき街を憂ひ迷ひて  
晝もなほ酒場の椅子に酔はむとするぞ。  
虚空を翔け行く鳥の如く  
情緒もまた久しき過去に消え去るべし。

十二月また來れり  
なんぞこの冬の寒きや。  
訪ふものは扉<sup>どあ</sup>を叩つくし  
われの懶惰を見て憐れみ去れども  
石炭もなく煖爐もなく  
白堊の荒漠たる洋室の中  
我れひとり寢臺<sup>べつと</sup>に醒めて  
白晝<sup>ひる</sup>もなほ熊の如くに眠れるなり。

#### 【鑑賞】

- ・ 初出「詩・現実」第4冊（1931年（昭和6）3月）。『氷島』（第一書房 1934年（昭和9）6月）所収。
- ・ 12月の寒い中、乃木坂倶楽部というアパートで、懶惰な生活をしている「我れ」の姿を描いた詩。
- ・ 詩集『氷島』の「詩篇小解」という自作解説で、朔太郎はこの作品について次のように記している。「乃木坂倶楽部は麻布一聯隊の附近、坂を登る崖上にあり。我れ非情の妻と別れてより、二兒を家郷の母に托し、暫くこのアパートメントに寓す。連日荒妄し、懶惰最も極めたり。白晝はベットに寝ねて寒さに悲しみ、夜は遅く起きて徘徊す。稀れに訪ふ人あれども應へず、扉に固く鍵を閉せり。我が知れる悲しき職業の女等、ひそかに我が孤寡を憫む如く、時に來りて部屋を掃除し、漸く衣類を整頓せり。一日辻潤來り、わが生活の荒蕪を見て啞然とせしが、忽ち顧みて大に笑ひ、共に酒を汲んで長嘆す。」
- ・ 「麻布一聯隊」とあるが、これは、「麻布三聯隊」が正しい。実際の乃木坂倶楽部は、2階建てであった。辻潤（1884－1944）は、朔太郎と交友を持ったニヒリスト。
- ・ 朔太郎は妻と離婚し、一旦、帰郷していたが、1929年（昭和4）11月、43歳の時、詩友の三好達治がみつけた「乃木坂倶楽部」（赤坂区檜町6番地（現：港区赤坂8丁目））という近代的な高級アパートに単身で移ってきた。そこでの生活は、かなり荒廃していたという。



## 虚無の歌

我れは何物をも喪失せず

また一切を失ひ盡せり。「氷島」

午後の三時。廣漠とした廣間<sup>ホール</sup>の中で、私はひとり麥酒<sup>ビール</sup>を飲んでた。だれも外に客がなく、物の動く影さへもない。煖爐<sup>ストーブ</sup>は明るく燃え、扉<sup>ドア</sup>の厚い硝子を通して、晩秋の光が侘しく射してた。白いコンクリートの床、所在のない食卓<sup>テーブル</sup>、脚の細い椅子の數數。

エビス橋<sup>そば</sup>の側に近く、此所の侘しいビヤホールに來て、私は何を待つてるのだらう？ 戀人でもなく、熱情でもなく、希望でもなく、好運でもない。私はかつて年が若く、一切のものを欲情した。そして今既に老いて疲れ、一切のものを喪失した。私は孤獨の椅子を探して、都會の街街を放浪して來た。そして最後に、自分の求めてるものを知つた。一杯の冷たい麥酒と、雲を見てゐる自由の時間！ 昔の日から今日の日まで、私の求めたものはそれだけだつた。

かつて私は、精神のことを考へてゐた。夢みる一つの意志。モラルの體熱。考へる葦のをののき。無限への思慕。エロスへの切ない祈禱。そして、ああそれが「精神」といふ名で呼ばれた、私の失<sup>う</sup>はれた<sup>う</sup>追憶<sup>う</sup>だつた。かつて私は、肉體のことを考へて居た。物質と細胞とで組織され、食慾し、生殖し、不斷にその解體を強ひるところの、無機物に對して抗爭しながら、悲壯に惱んで生き長らへ、貝のやうに呼吸してゐる悲しい物を。肉體！ ああそれも私に遠く、過去の追憶にならうとしてゐる。私は古い、肉慾することの熱を無くした。墓と、石と、蟾蜍<sup>ひきがえる</sup>とが、地下で私を待つてるのだ。

ホールの庭には桐の木が生え、落葉が地面に散らばつて居た。その板塀で圍まれた庭の彼方、倉庫の竝ぶ空地の前を、黒い人影が通つて行く。空には煤煙が微かに浮び、子供の群集する遠い聲が、夢のやうに聞えて來る。廣いがらんとした廣間<sup>ホール</sup>の隅で、小鳥が時々囀つて居た。エビス橋の側に近く、晩秋の日の午後三時。コンクリートの白つばい床、所在のない食卓<sup>テーブル</sup>、脚の細い椅子の數數。

ああ神よ！ もう取返す術<sup>すべ</sup>もない。私は一切を失ひ盡した。けれどもただ、ああ何といふ楽しさだらう。私はそれを信じたいのだ。私が生き、そして「有る」ことを信じたいのだ。永久に一つの「無」が、自分に有ることを信じたいのだ。神よ！ それを信ぜしめよ。私の空洞<sup>うつろ</sup>な最後の日に。

今や、かくして私は、過去に何物をも喪失せず、現に何物をも失はなかつた。私は喪心者のやうに空を見ながら、自分の幸福に満足して、今日も昨日も、ひとりで閑雅な麥酒<sup>ビール</sup>を飲んでる。虚無よ！ 雲よ！ 人生よ。

## 【鑑賞】

- ・ 初出「四季」第17号（1936年（昭和11）5月）。『宿命』（創元社 1939年（昭和14）9月）所収。
- ・ 午後、一人で、「エビス橋のビアホール」でビールを飲み、若いときに求めた様々なものを失ったことを認め、人生の虚無に思いをはせるという詩。「エビス橋のビアホール」を舞台に、他人に無関心な都市が描かれ、逆にそこに都市の心地よさを認めようとする逆説的な認識が描かれている。
- ・ 日本麦酒醸造（サッポロビールの前身）は、1887年（明治20）、恵比寿に工場建設用地を取得し、「ゑ

びすビール」を発売した。1903年（明治36）には、ビールの運搬のために日本鉄道品川線（現在の山手線）に貨物駅を開設し、さらに、1906年（明治39）、貨物駅のそばに旅客用の「恵比寿停留所」を開設した。

- ・詩集『氷島』の「詩篇小解」という自作解説に、朔太郎は、この作品について次のように記している。「エビス橋のピアホールは、省線の恵比寿驛に近く、工場區街にあり、常客の大部分が職工や労働者であるため、晝間はいつも閑寂にがらんとしてゐるのである。一頃私はその近所に居たので、毎日のやうに通つて麥酒を飲んだり、人氣のない廣間の中で、ぼんやり物を考へながら、秋の日の午後を暮してゐた。」

## おわりに

萩原朔太郎は、群馬県前橋市に開業医の家に生まれ、経済的に余裕のある家庭の恵まれた環境の中で育った。しかし、39歳の時に上京するまでは基本的に前橋で生活をし、故郷前橋に対する思いは複雑なものがあつた。詩を創作し、マンドリンなどの音楽にも関心のある地方都市のインテリゲンチヤにとつて、変化や刺激に乏しい地方都市は、自己の文化的、精神的欲求をかなえられない、忌むべき場所として映つたのである。また、前橋の人々の朔太郎へのまなざしも冷たく、故郷に強い疎外感を感じたのであつた。

朔太郎にとって、東京という都市は、地方都市へのこのような嫌悪感を解消してくれる場所としてまづ存在した。そこには、お互いに無関心な人々の生活があり、自分も、誰にも煩わされることなく文化的な生活を営み、また、文学者と交流し、創作活動を行うことができる保証があつた。

朔太郎が東京に住居を移すのは、1925年（大正14）2月、38歳の時であるが、それまでにもしばしば上京し、東京の文学者たちと交流し、浅草の盛り場で遊んだりしている。朔太郎が上京したのは、関東大震災後、東京の人口が増え始め、市街地が郊外に延びていった時代であり、朔太郎も自宅を持つまでは、そのような郊外を転々とした。時代は、昭和初期の昭和恐慌の時期であり、軍部が次第に台頭してゆき、1931年（昭和6）には、満州事変が起こり、以降15年にわたる戦争の時代が始まる。朔太郎は、享樂と不安の綾なす時代の東京に生きたのである。

そのようななか、朔太郎は東京を描いた詩を多く書いており、「えどはくカルチャー」では、その一部を紹介した。しかし、それらの詩に書かれた東京は、決して近代的で明るい性質の都会ではない。むしろ、貧しく暗い東京である。大正時代から昭和初期にかけて、日本は農業国から工業国へ転換を果たし、東京は重化学工業を發展させ、多くの工場労働者が東京に集まっていた時代である。朔太郎は、そのような時代の下層の労働者や生活者に焦点を当てて詩を書いている。朔太郎は、彼らの中に自分の姿や人間の真の姿を認めたのかもしれない。朔太郎が、東京に強くひかれたのは、故郷への反発からだけでなく、むしろ、東京の影の面に強く魅力を感じたからでもあろう。詩人にとって、都市の持つ影の部分は、魅力のあるものであつたのだと考えられる。

#### 4. 中野重治、プロレタリア詩人達たちのうたった東京

##### はじめに

第4回目の講座では、大正時代から昭和前期にいたる、社会問題をテーマにした詩を取りあげた。紹介したのは、民衆詩派の詩、アナキズムの詩、プロレタリアの詩である。

民衆詩派とは、大正時代に、市民や労働者、農民の生活や労働などについてわかりやすい口語によって表現した詩人たちで、背景に大正デモクラシーの思想があった。

それに続く関東大震災から昭和前期にかけては、アナキズムの詩やプロレタリアの詩が現われた。関東大震災による社会不安、資本主義の発達による物質文明の隆盛、そして、都市化の進展は、詩の世界にも大きな影響を及ぼした。アナキズムの詩は、国家権力など一切の権威を否定する反抗意識を前衛的様式によって表現した。また、大正末期から昭和初期にかけての社会主義運動、労働者運動の高揚に伴い、社会問題を詩の主題に取りあげるプロレタリア文学運動がおこった。

第4回目では、大正時代から昭和戦前期にかけて、社会が抱える問題を書いた詩を取りあげた。

##### （1）「民衆詩派」の詩

###### ①民衆詩派

民衆詩派の詩人は、市民や労働者、農民の生活や労働を題材とし、それらを平易な口語自由詩によって表現した。その背景には、大正デモクラシーの精神があり、ホイットマン（Walter Whitman 1819－1892）などのアメリカ民主主義詩人の影響があった。民衆詩派には、内容と表現の双方で、詩を現実生活に近づけ、詩を民衆に近づけたという功績があった。しかし、一方で詩を卑俗化した面もあり、芸術的完成度の低さを北原白秋などから非難され、また、アナキズム系、プロレタリア系の詩人たちからは、社会意識の不徹底さを指摘されもした。

「民衆詩派」という名称は、1918年（大正7）、福田正夫が民衆詩社を結成して創刊した詩誌「民衆」に由来する。1917年（大正6）あたりから1924年（大正13）ころにかけて、約10年間活動を展開した。民衆詩派の代表的な詩人は、加藤一夫（1887年（明治20）～1951年（昭和26））、白鳥省吾（1890年（明治23）～1973年（昭和48））、富田碎花（1890年（明治23）～1984年（昭和59））、百田宗治（1893年（明治26）～1955年（昭和30））、福田正夫（1893年（明治26）～1952年（昭和27））などである。

###### ②白鳥省吾

「えどはくカルチャー」では、東京を描いた民衆詩派の作品として、白鳥省吾の「殺戮の殿堂」を紹介した。白鳥省吾は、1890年（明治23）年に宮城県栗原郡築館町に生まれ、旧制築館中学校から、1909年（明治42）早稲田大学に入り、本格的な文芸活動をはじめた。アメリカの詩人ホイットマンに傾倒し、民主主義的、人道主義的な思想性を深め、1916年（大正5）ころから、口語自由詩による民主的傾向の詩を書き始めた。

代表的な詩集に『大地の愛』（抒情詩社 1919年（大正8）6月）がある。128編のほぼすべてが口語

自由詩で、「殺戮の殿堂」はこの詩集に収められている。

## 殺戮の殿堂

人人よ心して歩み入れよ、  
静かに湛へられた悲痛な魂の  
夢を光を  
かき擾<sup>みだ</sup>すことなく魚のやうに歩めよ。

この遊就館のなかの砲弾の破片や  
世界各國と日本とのあらゆる大砲や小銃、  
鈍重にして残忍な微笑は  
何物の手でも温めることも柔げることも出来ずに  
その天性を時代より時代へ  
場面より場面へ轉轉として血みどろに轉び果てて、  
さながら運命の洞窟に止まつたやうに  
凝然と動かずに居る。

私は又、古くからの名匠の鍛へた刀劍の數數や  
見事な甲冑や敵の分捕品の他に、  
明治の戦史が生んだ數多い將軍の肖像が  
壁間に列んでゐるのを見る。  
遠い死の圏外から  
彩色された美しい軍服と厳しい顔は、  
蛇のぬけ殻のやうに力なく飾られて光る。  
私は又手足を失つて皇后陛下から義手義足を賜はつたといふ士卒の  
小形の寫真が無數に竝んでゐるのを見る、  
その人人は今どうしてゐる？  
そして戦争はどんな影響をその家族に與へたらう？  
ただ御國の爲に戦へよ  
命を鵠毛よりも輕しとせよ、と  
ああ出征より戦場へ困苦へ……  
そして故郷からの手紙、陣中の無聊、罪惡、  
戦友の最後、敵陣の奪取、泥のやうな疲勞……  
それらの血と涙と歡喜との限りない經驗の展開よ、埋没よ。

温かい家庭の團欒の、若い妻、老いた親、なつかしい兄弟姉妹と幼児、  
私は此の士卒達の背景としてそれらを思ふ。  
そして見ざる溜散弾も  
轟きつつ空に吼えつつ何物をも弾ね飛ばした。  
止みがたい人類の欲求の  
永遠に血みどろに聞こえる世界の勝鬨よ、硝煙の匂ひよ、  
進軍喇叭よ。

おお殺戮の殿堂に  
あらゆる傷つける魂は折りかさなりて、  
静かな冬の日の空気は死のやうに澄んでゐる  
そして何事もない。

#### 【鑑賞】

- ・「詩歌」（1918年（大正7）3月）、そして、「民衆」（1919年（大正8）1月）に発表され、『大地の歌』（抒情詩社 1919年（大正8）6月）に収録された。さらに、民衆詩派6名のアンソロジーである『日本社会詩人詩集』（1922年（大正11）1月 福田正夫／編 日本評論社／発行）に収録されたが、社会的色彩の濃い内容であったため、全96編のうち6編が全編伏字にして発売された。この「殺戮の殿堂」も全編、伏字「ゝ」により発表され、一字も読むことができない状態であった。
- ・靖国神社にある戦争遺品展示館、遊就館へ行行って、陳列された様々な展示資料（武器、軍人の肖像、負傷した兵士たちの写真など）を見、そこに軍国主義日本の象徴を認め、戦争に対する批判的精神を表現した詩。「殺戮の殿堂」とは遊就館のことである。
- ・「遊就館」は、靖国神社に附属する一種の武器博物館。1882年（明治15）に、新政府軍（官軍）戦没者ゆかりの資料を展示する目的で開館した。自国の武器だけでなく、敵軍からの分捕品も展示した遊就館は、軍国主義の勢威誇示の場でもあった。
- ・「民衆」に発表された時（1919年（大正8）1月）、この詩に、次のような自注が付けられた。「東京に住むこと十年余にして、九段の遊就館に此年始めて友と共に入る、中に羅列されたるもの凡て人間の悲哀を語る、誰れか其の感慨をコンベンショナルとなすべきぞ、一見通俗に見えて然も其の根底に絶対新にして永遠新なる物を発見せざるものに偉大なる詩歌なし。」
- ・この作品は、戦争や軍国主義への批判を内容としているにもかかわらず、表現は自己抑制的で落ち着いており、堂々とした詩となっている。展示資料を写實的に描写しており、その技法は成熟している。民衆詩派の詩には感嘆詞や感情的な口調を多用し、詩作品として未熟になることが多いが、この詩にはそのようなところがなく、作品として高い質のものとなっている。

## (2) アナキズムの詩

### ①アナキズムの詩

アナキズムとは、国家権力など一切の権威を否定し、自由人の自由な結合による理想社会をめざす思想であり、それを直接文学に反映したものがアナキズム文学と呼ばれる。日本においては、大杉栄、宮嶋資夫、荒畑寒村らが、雑誌「近代思想」に小説や評論を掲載し、本格的なアナキズムの思想を展開した。

大正後期、思想としてのアナキズムよりも、情念的な反抗意識においてアナキズムを受容し、これをダダイズムなど前衛の様式と結びつけて、芸術革命を目指した詩人たちがいた。萩原恭次郎、岡本潤、小野十三郎、秋山清、森竹夫らである。アナキズム系の詩誌としては、「赤と黒」(1923年(大正12)創刊)、「文芸解放」(1927年(昭和2)創刊)、「弾道」(1930年(昭和5)創刊)などがある。

アナキズムの文学は、広義にはプロレタリア文学とも解釈されるが、政治が文学に優先するプロレタリア文学とは相容れない性質を持っている。

「えどはくカルチャー」では、アナキズムの詩として、萩原恭次郎の「日比谷」と森竹夫の「保護職工」を紹介した。

### ②萩原恭次郎

萩原恭次郎(1899年(明治32)～1938年(昭和13))は、群馬県前橋市に生まれた。1923年(大正12)1月、壺井繁治、岡本潤らと詩誌「赤と黒」を創刊し、アナキズムの思想的立場に立った詩人である。「赤と黒」に続いて、「ダムダム」や「マヴォ」という前衛的な雑誌を経て、未来主義や構成主義、ダダイズムなど、第一次世界大戦前後からヨーロッパで出現した様々な文芸思潮に触れ、1925年(大正14)、第1詩集『死刑宣告』(長隆舎書店 1925年(大正14)10月)を刊行した。日本近代の資本主義社会への憎悪を前衛的な手法でぶつけ、従来の伝統的抒情詩精神に衝撃をあたえ、刊行と同時に激しい反響を呼んだ。また、この詩集は、一編ごとにリノリウム版画を組み合わせ、写真版を多数挿入しており、文学と美術の総合芸術的な詩集ともなっている。「日比谷」は、詩集『死刑宣告』の代表的な作品である。

#### 日比谷

強烈な四角

鎖と鐵火と術策

軍隊と貴金と勳章と名譽

高く 高く 高く 高く 高く 高く聳える

首都中央地点——日比谷

屈折した空間

無限の陷穽と埋沒

新しい智識使役人夫の墓地

高く 高く 高く 高く 高く より高く より高く

高い建築と建築の暗間

殺戮と虐使と嚙争

高く 高く 高く 高く 高く 高く 高く

動く 動く 動く 動く 動く 動く 動く

日 比 谷

彼は行く——

彼は行く——

凡てを前方に

彼の手には彼自身の鍵

虚無な笑ひ

刺戟的な貨幣の踊り

彼は行く——

點

黙々と——墓場——永劫の埋没へ

最後の舞踏と美酒

頂點と焦點

高く 高く 高く 高く 高く 高く 高く 高く 聳える尖塔

彼は行く 一人！

彼は行く 一人！

日 比 谷

#### 【鑑賞】

- ・初出「日本詩人」（1925年（大正14）10月）。『死刑宣告』（長隆舎書店 1925年（大正14）10月）所収。  
初出の「日本詩人」の追記によれば、この詩が書かれたのは、1923年（大正12）7月である。
- ・日比谷を、近代日本の権力や財力、技術力などが集中する首都の中央地点と見なし、その活力を前衛的な手法で表現する。ただ、その前衛的な表現のなかに、都市への憎悪・批判だけでなく、賛美の念も微妙なバランスを保って表現されている。
- ・日比谷は、日本資本主義の支配機構の集中点であったが、日比谷公園は、労働者と警官隊との衝突の場でもあった。日比谷焼き討ち事件（1905年（明治38）、電車賃値上げ反対大会（1906年（明治39））、米騒動（1918年（大正7））、普通選挙制度要求集会（1919年（大正8））などは、日比谷公園を舞台として起こったものである。

### ③森竹夫

森竹夫（1905年（明治38）～1946年（昭和21））は、静岡県榛原郡萩間村黒子に生まれる。1929年（昭和4）、上京し、アナキズム系の詩人たちと交友を持ち、アナキズム系詩誌の「学校」などに参加し、作品を発表する。戦前、満州に渡るが、敗戦後、帰国する。帰国後、発疹チフスに感染し、42歳で亡くなる。三男は、詩人の三木卓氏である。生前は、詩集を発刊しなかったが、死後、三木卓氏の編集により、詩集『保護職工』（風媒社 1964年（昭和39）12月）が刊行された。

### 保護職工

働いてゐるこの機械は家庭用シンガーミシン臺ではない

旧式な製本の安機械

彼女は磨き齒車に油を注<sup>き</sup>す

埃をうかべた日光が漸くさぐりあててくらがり

だまりやさん

だまりやさん

だけどわたしはお前がちつと何をこらへてゐるのか知つてゐるの

十六歳未満だから保護職工

何てかがやかしい名だ美しい名だ

残業はたつぷり四時間

活動小屋のはねる頃になつて

半分眠つたこの保護職工は縄のやうなからだで

露地から電車にたどりつく

ガスのたまつた神田の工場街では雀もあそばない

十一月に入つて冷たい雨がふり出した

通りがかりに見ると彼女は今日も見えぬ

ちつと光をこらした機械の上におどろくべき鮮明さで

保護職工の指紋がついてゐた

### 【鑑賞】

- ・ 初出「1929年版 学校詩集」（1929年（昭和4）12月）。詩集『保護職工』（風媒社 1964年（昭和39）12月）所収。
- ・ 昭和初期、神田の小さな製本工場で過酷な労働をする少女の工員を描く。寡黙な少女は、疲労のためか、工場に出勤しなくなり、製本機械の上にこの少女の指紋だけが残っている。



- ・この詩の舞台になっている神田界限は、明治以降、官立・市立の学校ができ、学校街となっていた。多くの学生が集まり、その学生相手に出版社・古書店街が形成され、出版関連業者、印刷関連業者も進出してきた。また、学生相手に映画館も数多くできた。森竹夫自身も、「保護職工」を作ったころ、小石川区原町（現：文京区白山）に住んでおり、近辺に印刷工場や製本所がたくさんあった。また、森自身、神田の印刷工場のようなところに勤めていたことがある。
- ・「保護職工」とは、かつて存在した、工場労働者の保護を目的とした「工場法」に出てくる用語で、「15歳未満の者と女子」を指す。（1923年（大正12）からは、16歳未満となり、この詩に記述のあるとおりの年齢となる。）「工場法」によると、保護職工は、1日12時間を超える就業（3条）、午後10時から4時までの深夜業（4条）及び危険・有害な業務への就業（9条）が禁止された。しかし、この内容について、繊維業界からの猛反対を受け、法律施行から15年間は2組交替制での昼夜作業が認められる猶予規定が置かれるなど内容的には不徹底であり、また、現場では十分にこの内容は守られず、この詩にあるように「残業はたっぷり4時間」という状況もまれではなかった。
- ・プロレタリア詩人の伊藤信吉は、この作品について次のように記している。「森竹夫の「保護職工」にはもう一つの問題がある。それはこの詩の言葉使い―表現が一般のプロレタリアほどけわしくなく、宣言風でも闘争的でもなく、作者がやや叙情的な姿勢で「保護職工」を見ていることである。それと同時に一定の表現意識―方法論の意識が読みとれることである。（中略）概括的にいって、プロレタリア詩人は詩的方法について関心が薄く、その主題をいそいで表面に押し出そうとする傾向が強かった。作品以前にある第一義のもの―階級的命題（主題・情熱）が、しばしば詩的方法を乗り越え、もしくは先走ったのである。「保護職工」にはそういう性急さがない。それは一つには、作者が抒情的な姿勢をとっていることによるが、また、一つにはその階級的命題と並んで、方法論の意識があったからとみてよい。そしてそこにはモダニズムの詩人たちに共通するような方法が看守される。（中略）ひょっとすると作者は、「おどろくべき鮮明さで保護職工の指紋がついていた」という最後のところから、逆にこの詩を組み立てたのかもしれない。プロレタリア詩として、こういう鮮明な視覚的認識は珍しい。そういう点からもこの詩は、注目してよい。今になっても読むに堪えるプロレタリア詩の一編である。」<sup>1)</sup> なお、この伊藤の文章で、「プロレタリア」と言っているのは、アナキズムの詩も含めての広義のプロレタリア詩のことである。

### （3）プロレタリアの詩

#### ①プロレタリアの詩

日本の「プロレタリア文学」とは、プロレタリア（労働者、無産者）の書いた文学という意味であるより、それをも含んだところの大正末期から昭和初期の社会主義ないし共産主義的な革命文学の総体を言う。

1920年代初め、日本の社会主義運動や労働運動において、アナ・ボル論争がおこった。アナルコサンディカリズム派（アナ派、無政府組合主義、）とボルシェビズム派（ボル派、マルクス主義、共産主義）の間で起った思想的・運動論的論争である。このアナ・ボル論争によりアナキズム系とマルキシズムが

はっきり分離し、文学運動の分野でも両者がはっきり分離した。

1920年代初期のプロレタリア雑誌（たとえば、第二次「種蒔く人」(1921年（大正10）創刊））では、アナキズム系、マルクス主義系が未だ袂を分かたず混在していたが、日本プロレタリア文藝連盟が、1926年（大正15）、日本プロレタリア芸術連盟と改称されたとき、アナキズム系とマルキシズム系の文学は分離された。

以降、プロレタリア詩とは、マルクス主義者の詩を指すようになる。「えどはくカルチャー」では、マルクス主義者である詩人、伊藤信吉（「川沿ひに」）、中野重治（「雨の降る品川駅」）、小熊秀雄（「東京風物伝」）を紹介した。

## ②伊藤信吉

伊藤信吉（1906年（明治39）～2002年（平成14））は、群馬県群馬郡元総社村（現：前橋市元総社町）生まれの詩人、文芸評論家。若い頃は、草野心平らのアナキズム系の詩誌「学校」で活動していたが、後にマルクス主義に移り、マルクス主義の指導的芸術団体「ナップ」に加わり、プロレタリア詩人として指導的立場に位置した。1932年（昭和7）、警視庁に検挙され、プロレタリア文学運動から退き、敗戦後は萩原朔太郎など日本近代詩についての批評活動を積極的に行った。最晩年は、詩集『老世紀界限で』（集英社 2001年（平成13）11月）を発刊するなどして、詩作活動も再開した。

### 川沿ひに

ぎつしり立混んだ人たちの間で  
電車が揺れるたびに  
わたしは揉まれてしまふ  
窓の向ふを見ると  
江戸川といふ川が流れてゐます  
わたしの乗る電車は川沿ひに走つてゐるのです

風の吹く夕方  
川ぶちに泊つた舟の上に  
チラ チラ と火が燃える  
風にコンロの火をあほがせながら  
赤ん坊をおぶつたおかみさんはせつせと米をとぐ  
この川を上り下りして  
荷をはこぶ舟の人たちはかうして晩ごはんのしたくです  
  
米をとぐおかみさんの手が

風に赤くさらされる  
風は電車へも吹きこんできて  
一日薄べりに坐り  
冷えきつたわたしのからだをなほさら寒くする  
空のおべんとう箱を持つて  
わたしもいま家へ帰るところです

けふは朝から  
アート紙の口絵を折つた  
わたしの手はかぢかみ ぢきに硬ばつてしまふ  
それでもせつせと折りつづけて  
けふの稼ぎは五十二銭  
わたしはまだ製本の折りにはなれてゐないのです

こんな寒い十一月なのに  
どこかにはもうお正月が来たのか  
けふ折つたのは正月の雑誌の口絵 アート紙の冷たい手ざはりに  
なほさら手はかぢかむし  
一枚 一枚と  
折りかさねるわたしの目に 薄べり一枚の仕事場で  
その絵の色がしみついてくるのです

砲兵工廠の塀も寒いし  
電車の中の風も寒い  
舟の上のおばさん  
もう米はとげましたか  
赤ん坊はあれで風邪をひきはしませんか  
家へ帰ると米をといで  
わたしも晩ごはんのしたくです

【鑑賞】

- ・詩集『故郷』（中外書房 1933年（昭和8）4月）所収。
- ・11月の寒いある日、製本工場で働く貧しい「わたし」が、江戸川沿いを走る、満員の路面電車で帰宅する途中、車窓から文京区の江戸川で船上生活をする女性とその赤ん坊を見て、彼らの幸福を願うという詩。

- ・「江戸川」とは、神田川の別称。都電荒川線早稲田停留場付近から飯田橋駅付近までの約2.1キロメートルの区間を特に「江戸川」と呼んでいた。「砲兵工廠」は、文京区のJR水道橋駅北側の東京ドーム、小石川後樂園一带にあった日本陸軍の兵器工場で、東京砲兵工廠という。1871年（明治4）から1935年（昭和10）まで操業し、小銃などの兵器の製造を行った。関東大震災によって甚大な被害を受け、1931年（昭和6）から逐次、小倉へ移転が実施された。煉瓦塙が、東京砲兵工廠を取り囲んでいた。
- ・河川や海で船上生活を営む、いわゆる「水上生活者」は、近代の東京では明治20年代から現われた。水上生活者は、河川・港湾において小運搬に従事する舢舨船の中で生活をする者（炊事船での生活者）と、船を常時繫留し、そこで居住する者（宿船での生活者）に分けられる。1931年（昭和6）の統計によれば、炊事船での生活者は神田川（江戸川を含む）では319隻あった。また、1935年（昭和10）、東京市部では水上生活者は4,253世帯、11,404人に上った。彼らは、東京の影を象徴する存在と行政機関からは見なされ、1964年（昭和39）の東京オリンピック・パラリンピックの頃には消滅していった。
- ・「わたし」が働く工場の場所は記されていないが、徳永直の『太陽のない街』（1929年（昭和4）6月号から雑誌「戦旗」に連載された）は、砲兵工廠近くの小石川の共同印刷のストライキを題材としたプロレタリア小説であり、この作品の下敷きとして『太陽のない街』も想定される。

### ③中野重治

中野重治（1902年（明治35）～1979年（昭和54））は、福井県坂井郡高<sup>たか</sup><sub>ぼこ</sub>村（現：福井県坂井市）生まれの詩人、小説家、評論家、政治家。旧制金沢第四高等学校時代から短歌や詩を発表しはじめ、東京帝国大学文学部独文科に入学すると、同人誌「裸像」や同人誌「驢馬」を創刊する。一方、東京帝国大学内の「新人会」という学生運動団体に入り、社会文芸研究会（のちのマルクス主義芸術研究会）を作るなど、プロレタリア運動に接近した。大学を卒業すると、ナップ（全日本無産者芸術連盟）、コップ（日本プロレタリア文化連盟）の中で常に中枢にあり、機関誌「プロレタリア芸術」、「戦旗」、「プロレタリア文学」に評論・小説・詩を発表し、プロレタリア文学運動の担い手として活躍した。

しかし、1932年（昭和7）4月に逮捕され、治安維持法違反で取り調べられ、1934年（昭和9年）5月に懲役2年執行猶予5年の判決で出所した。法廷では、日本共産党員であったことを認め、いわゆる転向をした。出所後、中野は自己の転向の総点検と反省を厳しく行い、敗戦後は共産党に再入党し、新日本文学会による民主主義文学運動の中心となって働く。また、共産党の参議院議員としても活動するが、1964年（昭和39）には共産党の運営・活動方針と対立し、党を除名される。

詩集としては、『中野重治詩集』（ナップ出版部 1931年（昭和6）10月）1冊があるのみ。プロレタリア詩における抒情性と思想性に特色を示した詩集。

「えどはくカルチャー」では、重治の代表作の一つ「雨の降る品川駅」を紹介した。初出形と決定形がかなり異なるので、双方を紹介し、重治の思想の変遷も考察した。

### 雨の降る品川駅

（決定形（『中野重治全集 第1巻』筑摩書房 1976）

辛よ さようなら

金よ さようなら

君らは雨の降る品川駅から乗車する

李よ さようなら

も一人の李よ さようなら

君らは君らの<sup>ちちはは</sup>父母の国にかえる

君らの国の川はさむい冬に凍る

君らの叛逆する心はわかれの一瞬に凍る

海は夕ぐれのなかに海鳴りの声をたかめる

鳩は雨にぬれて車庫の屋根からまいおりる

君らは雨にぬれて君らを追う日本天皇を思い出す

君らは雨にぬれて 髭 眼鏡 猫脊の彼を思い出す

ふりしぶく雨のなかに緑のシグナルはあがる

ふりしぶく雨のなかに君らの瞳はとがる

雨は敷石にそそぎ暗い海面におちかかる

雨は君らの熱い頬にきえる

君らのくろい影は改札口をよぎる

君らの白いモスソは歩廊の闇にひるがえる

シグナルは色をかえる

君らは乗りこむ

君らは出発する

君らは去る

さようなら 辛

さようなら 金

さようなら 李

さようなら 女の李

行つてあのかたい 厚い なめらかな氷をたたきわれ

ながく堰<sup>せ</sup>かれていた水をしてほとばしらしめよ

日本プロレタリアートのうしろ盾まえ盾

さようなら

報復の歓喜に泣きわらう日まで

### 【鑑賞】

- ・初出「改造」(1929年(昭和4)2月)。『中野重治詩集』(ナツプ出版部 1931年(昭和6)10月)所収。初出形から幾度か形を変えて、決定形(筑摩書房『中野重治全集 第1巻』1976)に至っている。これは決定形。
- ・日本国家によって強制的に朝鮮に送還される、革命家と思われる朝鮮人を、やはり革命家であろう自分が、夕暮れ時、雨の降る品川駅で見送り、彼らの革命家としての願いが実現することを願うという詩。
- ・朝鮮へ送還される朝鮮人たちは、品川駅を発って汽車で下関まで行き、そこから釜山<sup>ふさん</sup>へ向かうのであろう。道中は、必ずしも強制送還(目的地へ送り届けるまで強制関係のもとにある)ではなく、いついつまでに、どこそこの警察へ出頭せよ、という書類を持たせて順送りするのが普通であったという。<sup>2)</sup>
- ・品川駅は、1872年(明治5)、横浜駅(現在の桜木町駅)との間で開業した。品川駅付近は、もともと海に築堤して鉄道を走らせており、「海鳴り」や「海面」という詩句が示すとおり、当時は品川駅付近まで海が迫っていた。

### 雨の降る品川驛

(初出形「改造」(1929年(昭和4)2月)。枠で囲んだ文字が「、」という伏字になっていた。)

御大典<sup>ごたいでん</sup> 記念に 李北満・金浩永におくる

辛<sup>しん</sup>よ さやうなら

金<sup>きん</sup>よ さやうなら

君らは雨の降る品川驛から乗車する

李<sup>り</sup>よ さやうなら

も一人の李<sup>り</sup>よ さやうなら

君らは君らの父母<sup>ちちはは</sup>の國に歸る

君らの國の河は寒い冬に凍る  
君らの反逆する心は別れの一瞬に凍る

海は雨に濡れて夕暮れのなかに海鳴りの聲を高める  
鳩は雨に濡れて煙のなかを車庫の屋根から舞ひ下りる

君らは雨に濡れて君らを追ふ日本天皇を思ひ出す  
君らは雨に濡れて 彼の髪の毛 彼の狭い額 彼の眼鏡 彼の髭 彼の醜い猫脊を思ひ出す

降りしぶく雨のなかに緑のシグナルは上がる  
降りしぶく雨のなかに君らの黒い瞳は燃える

雨は敷石に注ぎ暗い海面に落ちかゝる  
雨は君らの熱した若い頬の上に消える

君らの黒い影は改札口をよぎる  
君らの白いモスソは歩廊の闇にひるがへる

シグナルは色をかへる  
君らは乗り込む

君らは出發する  
君らは去る

おゝ  
朝鮮の男であり女である君ら  
底の底までふてぶてしい仲間  
日本プロレタリアートの前だて後だて  
行つてあの堅い 厚い なめらかな氷を叩き割れ  
長く堰かれて居た水をしてほとばしらしめよ  
そして再び  
海峡を躍りこえて舞ひ戻れ  
神戸 名古屋を経て 東京に入り込み  
彼の身邊に近づき  
彼の面前にあらはれ

彼を捕へ

彼の顎を突き上げて保ち

彼の胸元に刃物を突き刺し

返り血を浴びて

ぬく  
温もありある復讐の歡喜のなかに泣き笑へ

### 【鑑賞】

- ・ 初出「改造」(1929年(昭和4)2月)、『中野重治詩集』(ナッパ出版部 1931年(昭和6)10月)所収。初出形から幾度か形を変えて、決定形(筑摩書房『中野重治全集 第1巻』1976)に至っている。これは初出形。ただし、初出では、枠で囲まれた部分が「ゝ」という伏字になっていた。
- ・ 「雨の降る品川駅」が「改造」に載って間もなく、朝鮮語誌「無産者」5月号第3巻第1号(無産者社1929年5月13日納本発行)に、この初出形の詩が朝鮮語に翻訳されて載った。それは、この雑誌の編集をしており、この詩の副題にある李北満が訳したと推定される。そして、その朝鮮語訳を発見した、朝鮮史研究家の水野直樹が日本語に散文訳し、それをもとに、文芸評論家の松下裕氏が、『中野重治全集』編集の際、詩の伏字字数に合せて復元し、『中野重治全集 第9巻』月報7(1977年(昭和52)5月)に掲載した。それが、上記の復元された、枠で囲まれた文言である。<sup>3)</sup>
- ・ 副題の「御大典」とは昭和天皇の即位式で、1928年(昭和3)11月10日、京都御所紫宸殿で行われた。この御大典に際して、これらの朝鮮人達は逮捕され、強制的に朝鮮へ送還された。「李北満」は朝鮮プロレタリア芸術同盟に属し、「金浩永」は在日本朝鮮労働総同盟の中央委員であった。2人は共に日本における朝鮮人芸術運動・労働運動の中心的メンバーであった。なお、中野重治自身も御大典前後29日間、予防検束として本郷本富士署に留置されている。
- ・ 御大典の年1928年(昭和3)は、2月に普通選挙法による初の総選挙があったが、3月には日本共産党への大弾圧(三・一五事件)、4月には治安維持法改正、公布施行(死刑罪、目的遂行罪追加)、7月には全県警察部に特別高等課(特高警察)設置と、治安体制の整備・確立の年であった。
- ・ 作品全体について、初出形と決定形と比較すると次のようなことが言える。初出形では、前半は、政治権力によって強制送還される朝鮮人の同士たちを見送るという「別れ」の抒情であるが、後半になると、その抒情が天皇個人に対する憎悪・怒りへ変貌してゆく。それは、文学作品として、また、人間の精神として短絡的で矮小なものである印象を与える。この点について、中野重治は後に次のように書いている。「「髯、眼鏡、猫背」—この手の言葉は、詩的表現としていささか低目の次元のものにも今おもいますが、当時の憎悪、ほとんど生理的だったそれに関係しているでしょう。(中略)天皇一人だけが白馬で登場する。(中略)そのさい、天皇はななめ前から写される。強い猫背がかくれる角度からだけ写されるのです。特にそれがいやだったのをおぼえています。ただし私は、憎悪というものを一般に低次元のものとは考えていません。」<sup>4)</sup>
- ・ 伊藤信吉は、この詩の変更について次のように記し、決定形を評価している。「(初出形の)九行は、アジェーション発想の生の叫びにおいて、ことばの規範的、固定的パターンにおいて、プロレタリア



詩の低い地帯へころげこんだ作品だった。つまり言えば中野さんほどの詩的才能にして、なお且つ規範的、固定的スタイルのプロレタリア詩を作り、そして、その才能によってそこから脱出し、九行削除と少なからぬ改作、改編によって、もっとも乱れた形の作品を、身にしみて感銘度の高い叙情的作品に練り上げたのである。この一編の出生と完成は、さながらプロレタリア詩の劇的形成のごときものであった。」<sup>5)</sup>

- ・また、この作品のなかに「日本プロレタリアートの前だて後だて」という句が、初出形、決定形双方にあるが、この句については様々な議論がある。つまり、この句が、日本の君主制を覆すのは、朝鮮の仲間たちの任務のような印象をあたえるのである。日本の君主制の廃止は日本人民の仕事であり、それを怠って朝鮮の人々が海を渡り、神戸名古屋を経て東京に潜入するのを待っているのかとさえ思われる。これについて、重治は次のように書いている。「「プロレタリアートの後だて前だて」という行がありますが、ここは、「猫背」とはちがうものの、民族エゴイズムのしっぽのようなものを引きずっている感じがぬぐい切れません。」<sup>6)</sup>

#### ④小熊秀雄

小熊秀雄（1901年（明治34）年～1940年（昭和15））は、北海道小樽市稲穂町に生まれた、詩人・小説家・漫画原作者・画家である。幼少期から職を転々とし、1922年（大正11）ころ「旭川新聞」社会部記者となり、文芸欄も担当し、詩や童話を書く。1928年（昭和3）、27歳のとき上京し、雑誌社や業界新聞で働き、1931年（昭和6）、プロレタリア詩人会に入会。プロレタリア文学運動は、次第に当局の弾圧により解体してゆくが、小熊秀雄はそのような中、ロシア詩人の研究を行い、美術論を書き、また、絵画を描くなど多面的な活動を続けた。1935年（昭和10）5月には、『小熊秀雄詩集』（耕進社）を出版する。小熊秀雄の詩は、反動期においてもそれに屈しない柔軟で不屈な精神を、豊富なイメージと独自の感受性で饒舌に詠ったところに特徴があり、戦時下の詩的抵抗をよく示す詩である。

小熊秀雄は、1929年（昭和4）の春、豊島区長崎町西向に転居し、以降、長崎町内を転々とする。このあたりは、「池袋モンパルナス」と呼ばれた地域で、多くのアトリエ村（貸し住居付きアトリエ群）が存在し、芸術家たちが暮らし、芸術活動の拠点となっていた。小熊秀雄は、「池袋モンパルナス」で多くの画家たちと交遊し、多彩な芸術活動を展開した。

「エドはくカルチャー」では、「東京風物伝」という東京の代表的な場所を描いた短詩の連作を紹介した。いずれも、日中戦争が始まった時期が背景になっており、経済的に逼迫してゆく庶民、軍国主義化してゆく政治、爛熟してゆく都市文化を、直接的でなく揶揄する形で批判した詩である。

#### 東京風物伝

##### 東京駅

東京駅は

ウハバミの  
燃える舌で  
市民の  
生活を吞吐する  
玄関口、  
朝は遅刻を怖れて  
階段を一足とび  
夕は  
疲れて生氣なく  
沈黙の省電に乗る  
所詮、悪蛇の毒気に触れて  
人々の  
麻痺は  
不感症なり。

## 隅田河

隅田河  
河上より水は  
河下に流るゝなり  
天の摂理に従へば  
古き水は  
新しき水に  
押しながされて  
海に入るなり  
一銭蒸気五銭となり  
つひに争議も起るなり  
あゝ、忙しき市民のためには  
渡るに橋は長すぎ  
せつかちな船頭にとつては  
水の流れは悠々すぎる、

## 丸の内

『戦争に非ず事変と称す』と

ラヂオは放送する  
人間に非ず人と称すか  
あゝ、丸の内は  
建物に非ずして資本と称すか、  
こゝに生活するもの  
すべて社員なり  
上級を除けば  
すべて下級社員なり。

### 浅草

汝 観音様よ、  
浅草の管理人よ、  
君は鳩には豆を我等には自由を一  
腹ふくるゝまで与へ給へ、  
彼は他人の投げた  
お賽銭で拝んでゐた  
かゝる貧乏にして  
チャッカリとした民衆に  
ご利益を与へ給へ

### 地下鉄

昼でも暗い中を  
走らねばならない  
お前不幸な都会の旅人よ、  
地下鉄を走るとき  
爽快な風が吹く  
でも少しも嬉しくない  
政治といふ大きな奴の  
肛門の中を走るやうだから  
地下鉄は  
つまり多少臭いところだ。

## 銀座

もし東京に裏街といふものが  
なかつたら  
銀座は日本一の表街だが、  
表は表だが  
銀座は  
医者にひつくりかへされた  
トラホームの眼瞼のやうだ  
ブツブツと華<sup>は</sup>美で賑やかな  
消費の粒が  
まつかにただれて列んでゐる  
突如  
ウインドーに  
煉瓦を投げつけて  
金塊を盗む悪漢現る。

### 【鑑賞】

- ・「東京風物伝」の初出がわかっているのは、以下の通りである。「浅草」（「農大新聞」1938年（昭和13）1月1日）、「地下鉄」（「農大新聞」1938年（昭和13）2月3日）、「銀座」（「農大新聞」1938年（昭和13）3月18日）
- ・これらの作品が書かれたころは、盧溝橋事件が起こり日中戦争が開始され（1937年（昭和12））、国家総動員法が成立し（1938年（昭和13））、太平洋戦争へと進む大きな流れの発端となった時期である。
- ・「東京駅」：東京駅を大資本の象徴として見、それが、市民や労働者の生活を苦しめ、日々の生活感覚を麻痺させていると批判する。
- ・「隅田河」：悠々と流れる隅田川を舞台に、厳しい経済状況や市民生活の苦しさを、戯画的に描く。この作品が書かれたころは、物価が高騰し、労働争議が頻発し、賃上げを求める交通機関のストライキが多発し、隅田川の「一銭蒸気」もストライキを行った。
- ・「丸の内」：1937年（昭和12）7月7日に、盧溝橋事件が起き、これを機に日中戦争が勃発する。この戦闘を、日本政府ははじめ「北支事変」、ついで「支那事変」と名付けた。「戦争」という言葉を使用せず、「事変」と呼ぶ、狡猾な政府を揶揄する。そして、丸の内という大資本と上級社員に使われる、数多くの下級社員の窮状を暗に訴える。
- ・「浅草」：浅草の観音様に、他人の賽銭で自由を願う民衆をユーモラスに描く。そして、彼らに御利益を与えて欲しいと願う。
- ・「地下鉄」：東京で地下鉄が始めて上野－浅草間を走ったのは1927年（昭和2）で、この作品が書かれ

た約10年前である。都会の最先端の地下鉄を、軍国主義政治の「肛門」に見立て、政治と地下鉄のような大資本の腐敗を揶揄する。

- ・「銀座」：華やかな銀座を、爛熟した消費の象徴の場としてとらえ、そこに義賊のような悪漢を登場させ、フラストレーションを晴らすという詩。銀座の華やかさを「医者にひっくりかへされたトラホームの眼瞼」と比喻しているところがリアルである。
- ・小熊秀雄は、詩人であると同時に、絵も多く描いている。小熊秀雄は、「画家・詩人・娘達」（1937年（昭和12）以降執筆）という随筆で次のように記している。「私は街をうろつくことが好きで、そうした街の漂泊のうちにさまざまな生きた人間の姿を捉えようとする。山の手に住んでいると、下町の状態がわからない。それでまず近くの板橋付近から、丸ビル、本所、浅草という風に、うろつきまわる。小さな路地に踏みこむと、そこには思いがけないような、珍しい人生をみつけだす。しかも下町の生活者たちはどんな小さな家の中でも、労働的で生産的なのである。（中略）事変が始まってからは、工場地帯の軍需工場付近をウロウロしていると、ろくな目に逢わないので、その方面には出かけないことにしているが、もっと自由な頃は、かなり工場の門内に奥深く入りこんで、労働者の機械の操作を眺めることができた。スケッチブックを抱えることで、先方では画家だときめてくれるので、画を描く材料でも求めにきたものだろうといった気安い眼でいてくれる。しかし悲しいことにはここでも誤解がつきまとう。私は画家ではなく詩人なのである。しかし手ぶらで街をうろついて誤解を深められるよりは、画家と誤解されて、誤解をその限度で打止められている方が私としては気が楽だ。しかしそのうちにスケッチブックの白い頁を何かしら汚したいという欲望が起り始め、ときにはソッと描いてみることもある。そのうちに次第に大胆になり、はては大っぴらに街頭でスケッチブックを拡げてかきだすという度胸ができてきた。そうしてスケッチは数百枚にも溜ってしまった。」

## おわりに

明治時代以降、詩のテーマは広がり、様々なものが取り上げられていったが、社会問題は、詩のテーマとして重要な位置を占めるものである。第2回目で紹介した、石川啄木によって書かれた「心の姿の研究」や「呼子と口笛」の詩も、社会の問題を取りあげたものであった。大正時代に入ると、人権や平和を尊ぶ大正デモクラシーの思潮が文学の世界にも広がり、昭和時代にはいると、国家権力への反抗を示す作品が書かれるようになる。特に、政治の中心地である東京では、そのような文学運動が活発に展開された。

この回では、大正時代から昭和前期にいたる、都市の社会問題をテーマにした民衆詩派の詩、アナキズムの詩、プロレタリアの詩を紹介した。国家権力を告発するような詩は、発禁処分にされることを懸念し、一部、あるいは、全編を伏字にして発表せざるを得ず、痛々しい姿をとるが、そこまでしても詩を発表し主張を伝えようとする詩人の態度には心打つものがある。また、「風刺」という方法により、発禁や伏字を避けるようとする工夫にも感心させられる。この回では、そのような詩人たちの詩を鑑賞していった。

また、社会問題をとりあげる作品は、その多くが、内容を主張することに意を用い過ぎ、散文的・説

明的になり、詩作品としては完成度の低いものが多いが、この回では、詩作品としても完成度の高いものを選んで紹介した。

詩は、個人の感情を対象とするだけでなく、社会をも対象とすることを確認し、その中でも質の高い詩を読むことで、大正時代から昭和前期の東京の社会状況、政治状況の一端を見ていった。

## おわりに

以上が、「えどはくカルチャー」で行った連続講座「詩の東京」(全9回)のうち、第1回から第4回までの概要である。

ここに取りあげた詩人たちは、いずれも地方から上京した詩人たちである。近代に入って東京は首都となり、政治・経済・文化の中心地となった。文学・美術・音楽など芸術においても、全国各地から多くの人材が東京に集まり、新しい時代の芸術作品を創り上げていった。詩の分野においても、多くの詩人たちが上京し、東京で生活をしながら詩を書いた。彼らは地方から出てきたため、よりいっそう東京の現実が見えたこともあり、その経験を基に東京を詩に描いていった。そこに描かれた東京は、あくまで言語によって美的に創造された虚構の世界ではあるが、当時の東京の姿の一面を誇張して再現して見せてくれたとも言える。

この連続講座では比較的わかりやすい作品、短い作品を選んで紹介した。しかし、東京を描いた詩は数多くあり、今後は、東京を描いた詩を悉皆的に集め、データベースを作成することが必要であろう。連続講座を実施するに際し、詩の選定には迷うこともあり、東京を描いた詩のデータベース作成など基礎的作業の必要性を強く感じた。

詩を、描かれた地域から読むということは、文芸評論家の前田愛や磯田光一などによって始められた。正津勉編『東京詩集(全3巻)』(作品社 1986-1987)や清岡智比古『東京詩 藤村から宇多田まで』(左右社 2009)など、東京を描いた詩のアンソロジーも編まれており、大いに参考にさせていただいた。この連続講座では、詩に描かれている地名を手がかりに、当時の東京の歴史やその地域の特徴を調べ、そこから詩作品の解釈や鑑賞を行ったが、連続講座を実施して、詩を描かれた地域から読むという方法論についての考察をさらに深める必要があることを痛感した。詩という芸術作品を、そこに描かれている地名という現実の世界からのみ解釈し鑑賞しては、詩の一面をしか読んでいないことになる。詩に、現実を超えた普遍的な内実を読み込んでゆくことはぜひ必要であり、この連続講座ではそれが不十分であったように思う。東京を描いた詩をどう深く読んでゆくかという課題は、先人の前田愛や磯田光一を学びながら、これからも追求してゆかねばならない問題と考える。

本稿は、連続講座「詩の東京」の第1回から第4回までの報告であるが、残りの第5回から第9回までの報告も、改めて行えればと考える。

## 【註】

1. 「パンの会」-北原白秋と木下杢太郎-

- 1) 木下杢太郎「パンの会の回想」（『近代風景』1927）
- 2) 野田宇太郎『日本耽美派文学の誕生』河出書房新社 1975
- 3) 野田宇太郎『日本耽美派文学の誕生』河出書房新社 1975
- 4) 野田宇太郎『日本耽美派文学の誕生』河出書房新社 1975
- 5) 木下杢太郎「パンの会の回想」（『近代風景』1927）
- 6) 野田宇太郎『日本耽美派文学の誕生』河出書房新社 1975
- 7) 野田宇太郎『日本耽美派文学の誕生』河出書房新社 1975
- 8) 『東京景物詩及其他』は、1916年（大正5）7月、改編改題されて、東雲堂書店より『雪と花火』として出版された。その「雪と花火余言」による。
2. 石川啄木と宮沢賢治
  - 1) 『日本近代文学大系23石川啄木』角川書店 1969
  - 2) 評論「所謂今度の事」（1910年（明治43）6月21日～7月／執筆）、評論「時代閉塞の現状 強権、純粹自然主義の最後及び明日の考察」（1910年（明治43）8月下旬／執筆）、ノート「日本無政府主義者陰謀事件経過及び附帯現象」（1911年（明治44）1月23日24日／執筆）、ノート「'V NAROD' SERIES A LETTER FROM PRISIN」（1911年（明治44）5月中／執筆）などが書かれた。
  - 3) 「私には法華文学の創作をすすめたという明確な記憶はないが、いろいろ信仰上の意見を交換した中には、当然私が田中智学先生から平素教えられている、末法における法華経修行のあり方について、熱心に話したことと思う。すなわちいわゆる出家して僧侶となり仏道に專注するのが唯一の途ではない、農家は鋤鋤をもって、商人はソロバンをもって、文学者はペンをもって、各々その人に最も適した道において法華経を身によみ、世に弘むるというのが、末法における法華経の正しい修行のあり方である、詩歌文学の上に純粹の信仰がにじみ出るようであればならぬ、ということと話したように思う。」（高知尾智耀『わが信仰わが安心』真世界社 1976）
  - 4) 『企画展示「東京」ノートの〈東京〉』宮沢賢治記念館／発行 栗原敦／監修 1995
  - 5) Webサイト「宮澤賢治の詩の世界」（浜垣誠司）
3. 萩原朔太郎
  - 1) 永瀬清子『女詩人の手帖』日本文教出版 1952（引用文が収められている「春の落葉－萩原朔太郎氏の面影」が書かれたのは1943年（昭和18））
  - 2) 阿部良雄訳『ボードレール全集Ⅳ』筑摩書房 1987
4. 中野重治、プロレタリア詩人達たちのうたった東京
  - 1) 伊藤信吉『逆流の中の歌』泰流社 1977
  - 2) 丸山圭一「『雨の降る品川駅』をめぐって：もう一つの「御大典記念」」（金沢大学教養部論集 人文科学篇第28-1）1990
  - 3) 林淑美『昭和イデオロギー－思想としての文学』平凡社 2005。林尚男『中野重治の肖像』創樹社 2001。
  - 4) 中野重治「『雨の降る品川駅』のこと」（『季刊三千里』第2号 1975年5月1日）
  - 5) 伊藤信吉「叙情的往來の断片」（『中央公論文芸特集』平成二年秋号）
  - 6) 中野重治「『雨の降る品川駅』のこと」（『季刊三千里』第2号 1975年5月1日）

## 【主要参考文献】

1. 「パンの会」－北原白秋と木下杢太郎－
  - ・野田宇太郎『近代作家研究叢書33 パンの会－近代文芸青春史研究－』（日本図書センター 1984）
  - ・野田宇太郎『日本耽美派文学の誕生』河出書房新社 1975
  - ・『木下杢太郎全集』（全25巻）岩波書店 1981-1983
  - ・『日本近代文学大系54近代詩集Ⅱ』角川書店 1973
  - ・『白秋全集』（全39巻別巻1巻）岩波書店 1984-1988
  - ・『日本近代文学大系28北原白秋』角川書店 1970
  - ・坂田稔『ユースカルチュア史 若者文化と若者意識』勁草書房 1979
2. 石川啄木と宮沢賢治

- ・『啄木全集』(全8巻) 筑摩書房 1978-1980
  - ・『日本近代文学大系23石川啄木』 角川書店 1969
  - ・国際啄木学会『石川啄木事典』おうふう 2001
  - ・「國文學 解釈と教材の研究 6月臨時増刊号 石川啄木の手帖」(第23巻第8号) 學燈社 1978
  - ・岩城之徳編「別冊國文學・NO.11 石川啄木必携」學燈社 1981
  - ・『〈新〉校本宮沢賢治全集』(全16巻別巻2巻) 筑摩書房 1995-2009
  - ・栗原敦監修『企画展示「東京」ノートの〈東京〉』宮沢賢治記念館 1995
  - ・小沢俊郎編『宮沢賢治研究叢書2賢治地理』學藝書林 1975
3. 萩原朔太郎
- ・『日本近代文学大系37萩原朔太郎』 角川書店 1971
  - ・『萩原朔太郎全集』(全15巻補巻1巻) 筑摩書房 1975-1978
  - ・磯田光一『萩原朔太郎』講談社 1987
  - ・近藤富枝『田端文士村』講談社 1975
  - ・近藤富枝『文壇資料 馬込文学地図』講談社 1976
  - ・大田区郷土博物館『馬込文士村ガイドブック〔改訂版〕』1996
4. 中野重治、プロレタリア詩人たちのうたった東京
- ・『日本プロレタリア文学集・38 プロレタリア詩集(一)』新日本出版社 1987
  - ・『日本プロレタリア文学集・39 プロレタリア詩集(二)』新日本出版社 1987
  - ・「文学」プロレタリア詩の時代(第53巻第1号) 岩波書店 1985
  - ・『伊藤信吉著作集』(全6巻) 沖積舎 2001-2003
  - ・『現代詩文庫 伊藤信吉詩集』思潮社 1989
  - ・『中野重治全集』(全19巻別巻1巻) 筑摩書房 1959-1963
  - ・『中野重治全集』(全28巻) 筑摩書房 1976-1980
  - ・林尚男『中野重治の肖像』創樹社 2001
  - ・林淑美『昭和イデオロギー—思想としての文学』平凡社 2005
  - ・『新版・小熊秀雄全集』(全5巻) 創樹社 1990-1991
5. 日本近現代詩史
- ・浅井清〔ほか〕編『新研究資料 現代日本文学 第7巻 詩』明治書院 2000
  - ・正津勉編、鮎川信夫解説『東京詩集1 Tokyo 1860～1923』作品社 1987
  - ・正津勉編、北村太郎解説『東京詩集2 Tokyo 1923～1945』作品社 1987
  - ・正津勉編、吉本隆明解説『東京詩集3 Tokyo 1945～1986』作品社 1986
  - ・清岡智比古『東京詩 藤村から宇多田まで』左右社 2009
  - ・日本近代文学館編『日本近代文学大事典』(全6巻) 講談社 1977-1978
  - ・原子朗編「別冊國文學・NO.35 近代詩現代詩必携」學燈社 1988
  - ・伊藤信吉〔ほか〕編『現代詩鑑賞講座』(全12巻) 角川書店 1968-1969
  - ・名著復刻全集編集委員会編『新選 名著復刻全集 近代文学館—作品解題』日本近代文学館1970
  - ・名著復刻全集編集委員会編『特選 名著復刻全集 近代文学館—作品解題』日本近代文学館1971
  - ・名著復刻全集編集委員会編『精選 名著復刻全集 近代文学館—作品解題』日本近代文学館1972
  - ・『日本の詩歌』(全30巻別巻1巻) 中央公論社 1967-1974
6. 東京
- ・石塚裕通、成田龍一『東京都の百年』山川出版社 1986
  - ・宮地正人『日本通史Ⅲ 近現代 国際政治下の近代日本』山川出版社 1987
  - ・吉見俊哉『都市のドラマツルギー』弘文堂 1987



## 「えどはくカルチャー」詩の東京（第1回～第4回）詩一覧

章	詩人	詩	制作年	初出誌	初出年	詩集	詩集発行年
パンの会 －北原白秋 と木下奎太郎－	木下奎太郎	兩國	1910年(明治43)5月	三田文学	1910年(明治43)7月	『食後の唄』	1919年(大正8)12月
	木下奎太郎	築地の渡し 竝序	－	スバル	1910年(明治43)2月	『食後の唄』	1919年(大正8)12月
	木下奎太郎	金粉酒	1910年(明治43)5月	三田文学	1910年(明治43)7月	『食後の唄』	1919年(大正8)12月
	木下奎太郎	珈琲	1910年(明治43)5月	三田文学	1910年(明治43)7月	『食後の唄』	1919年(大正8)12月
	北原白秋	空に真赤な	1908年(明治41)5月	八少女	1909年(明治42)1月	『邪宗門』	1909年(明治42)3月
	北原白秋	公園の薄暮	1909年(明治42)2月	スバル	1909年(明治42)3月	『東京景物詩及其他』	1913年(大正2)7月
	北原白秋	新聞紙	1910年(明治43)6月	文章世界	1910年(明治43)6月	『東京景物詩及其他』	1913年(大正2)7月
	石川啄木と宮沢賢治	短歌 9首	－	－	－	『一握の砂』	1910年(明治43)12月
	石川啄木	短歌 2首	－	－	－	『悲しき玩具』	1912年(明治45)6月
	石川啄木	夏の街の恐怖	－	「東京毎日新聞」	1909年(明治42)12月12日	『心の姿の研究』(草稿)	1909年(明治42)12月～ 1910年(明治43)1月
萩原朔太郎	石川啄木	ココアのひと匙	1911年(明治44)6月15日	創作	1911年(明治44)7月	『呼子と口笛』(草稿)	1911年(明治44)7月
	石川啄木	飛行機	1911年(明治44)6月27日	－	－	『呼子と口笛』(草稿)	1911年(明治44)7月
	宮沢賢治	鉱物陳列館	1916年(大正5)3月10日?	－	－	『「東京」ノート』(草稿)	1930年(昭和5)ころ
	宮沢賢治	公衆食堂(須田町)	1921年(大正10)1月～8月	－	－	『「東京」ノート』(草稿)	1930年(昭和5)ころ
	宮沢賢治	丸善階上喫煙室小景 一九二 八・六・一八	1928年(昭和3)6月18日	－	－	『「東京」ノート』(草稿)	1930年(昭和5)ころ
	萩原朔太郎	かなしい遠景	－	詩歌	1915年(大正4)1月	『月に吠える』	1917年(大正6)2月
	萩原朔太郎	田舎を恐る	－	感情	1917年(大正6)1月	『月に吠える』	1917年(大正6)2月
	萩原朔太郎	青猫	－	詩歌	1917年(大正6)4月	『青猫』	1923年(大正12)1月
	萩原朔太郎	群衆の中を求めて歩く	－	感情	1917年(大正6)6月	『青猫』	1923年(大正12)1月
	萩原朔太郎	群衆の中に居て	－	四季	1935年(昭和10)2月	『宿命』	1939年(昭和14)9月
中野重治、プロレタリア詩 人達たちのうたった東京	萩原朔太郎	公園の椅子	－	上州新報	1924年(大正13)1月	『純情小曲集』	1925年(大正14)8月
	萩原朔太郎	大井町	－	婦人之友	1925年(大正14)9月	『萩原朔太郎詩集』	1928年(昭和3)3月
	萩原朔太郎	郵便局	－	若草	1929年(昭和4)3月	『宿命』	1939年(昭和14)9月
	萩原朔太郎	乃木坂俱樂部	－	詩・現実	1931年(昭和6)3月	『水島』	1934年(昭和9)6月
	萩原朔太郎	虚無の歌	－	四季	1936年(昭和11)5月	『宿命』	1939年(昭和14)9月
	萩原朔太郎	殺戮の殿堂	－	詩歌	1918年(大正7)3月	『大地の歌』	1919年(大正8)6月
	萩原恭次郎	日比谷	1923年(大正12)7月	日本詩人	1925年(大正14)10月	『死刑宣告』	1925年(大正14)10月
	森竹夫	保護職工	－	1929年版學校詩集	1929年(昭和4)12月	『保護職工』	1964年(昭和39)12月
	伊藤信吉	川沿ひに	－	－	－	『故郷』	1933年(昭和8)4月
	中野重治	雨の降る品川駅	－	改造	1929年(昭和4)2月	『中野重治詩集』	1931年(昭和6)10月
小態秀雄	小態秀雄	東京風物伝 東京駅	－	－	－	－	－
	小態秀雄	東京風物伝 隅田河	－	－	－	－	－
	小態秀雄	東京風物伝 丸の内	－	－	－	－	－
	小態秀雄	東京風物伝 浅草	－	農大新聞	1938年(昭和13)1月	－	－
	小態秀雄	東京風物伝 地下鉄	－	農大新聞	1938年(昭和13)2月	－	－
	小態秀雄	東京風物伝 銀座	－	農大新聞	1938年(昭和13)3月	－	－
	小態秀雄	東京風物伝	－	－	－	－	－
	小態秀雄	東京風物伝	－	－	－	－	－